

令和4年度 郡山市中學生長崎派遣事業

2022

# ナガサキへのメッセージ

← 報告書 →



郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会

# 郡山市核兵器廃絶都市宣言

(昭和59年6月15日議決)

世界恒久平和実現のために、核兵器を廃絶することは、人類共通の願望である。

核兵器は人類と地球の命運を左右するにもかかわらず、新しい軍事技術の開発が続けられている。

わが国は、世界で唯一の核被爆国として、平和を愛するすべての国の人々とともに、人類の安全と生存のため不断の努力を続けるべきである。

郡山市は、日本国憲法に基づいて、核兵器の完全廃絶と軍備縮小を全世界に訴え、人類の願いである世界平和の実現を希求し、核兵器廃絶都市であることを宣言する。



令和4年度 郡山市中學生長崎派遣事業

## 「2022 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市長 品川 萬里

1945年8月。広島と長崎に投下された原子爆弾により、街は一瞬にして廃墟と化し、数多くのかげがえのない命が奪われました。また、今なお多くの被爆者の方々が後遺症で苦しんでおられます。

本市におきましても、4度にわたる空襲により大きな被害を受け、500名を超える尊い命が犠牲となりました。

あの悲惨な戦争の終結から77年が経過し、戦争の記憶が風化しつつある今、私たちは当たり前のように平和を享受しております。しかし、世界情勢は大きく変化しており、私たちは、平和について、これまで以上に考えなければならない状況にあります。今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれた、かけがえのないものであることを決して忘れてはなりません。

被爆者の平均年齢が84歳を超え、被爆者が減少していく中で、今後、核兵器使用により引き起こされた惨禍が二度と繰り返されることのないよう、その廃絶を願う全ての人々の思いを引き継ぎ、次の世代に伝えていくことは、平和な時代に生きる私たちの使命であります。

そのため、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市では、1996年から「平和を考える市民の集い実行委員会」との共催により、次代を担う中学生を長崎市へ派遣しておりましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、一昨年は事業の実施が見送られ、また昨年はオンライン開催のため、今回、実に3年振りの派遣となりました。

参加された中学生の皆さんは、原爆資料館や永井隆記念館、旧城山国民学校校舎の見学、平和祈念式典への参列をはじめ、青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話や平和学習などへの参加を通して、戦争の悲惨さや原子爆弾による被害の恐ろしさ、命の大切さなど、たくさんのことを学んだことと思います。また、全国から参加した同世代の青少年と、戦争のない世界の実現のために意見を交わすことができたことと思います。

中学生の皆さんには、4日間の研修を通して学んだことを家族や友人などできるだけ多くの方々に話し、平和の大切さを伝えていただきたいと思います。

この報告書には、参加された中学生の皆さんが平和の尊さや核兵器廃絶の必要性について学んだことや感じたことについて、それぞれの言葉でまとめられています。この報告書が一人でも多くの方々にご覧いただけることを願うとともに、平和について考えるきっかけとしていただければ幸いです。

長崎市の皆様には、当市派遣団を今年も温かく迎え入れていただき、この場を借りて、改めて御礼を申し上げます。

結びに、本事業の実施に当たり多大なる御支援、御協力をいただきました関係者の方々に心から感謝を申し上げます、挨拶といたします。



## 令和4年度 郡山市中學生長崎派遣事業 「2022 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて

郡山市教育委員会教育長 小野 義明

市内の中学校・義務教育学校から選出された皆さんは、令和4年度郡山市中學生長崎派遣団員として、令和4年8月7日から4日間長崎市を訪問しました。長崎市長に「平和へのメッセージ」を伝える重要な役割を担った皆さんは、きっと平和の尊さや核兵器廃絶の必要性を強く認識されたことと思います。

77年前の8月9日、原子爆弾の投下により、長崎の街は一瞬で焼け野原となり、多くの尊い命が奪われました。被爆された方々は、癒えることのない傷を負い、今もなお、後遺症や健康への強い不安に苦しみ続けています。さらに、被爆者の高齢化が進み、被爆体験の記憶を今後どう受け継いでいくのかが問われております。

そのような中、これからの時代を担う皆さんが、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列したこと、さらに原爆資料館等を見学したことなどは、平和への思いを受け継ぐ意味で、とても意義深いことであると感じています。皆さんが長崎の地に実際に立ち、自らの目で確かめ、青少年ピースフォーラム等へ参加して意見交換等を行った体験は、未来の平和を考える上で、きっと大きな財産になったことと思います。

この報告書は、長崎で様々なことを体験した皆さんが、実際に感じ取ったことを、平和へのメッセージとしてまとめたものです。どのページを見ても、一人一人の平和への思いが、それぞれの言葉でつづられています。私は、参加した皆さん全員が、核兵器が及ぼす悲惨さや、平和の大切さに触れるとともに、「未来の平和」のために自分自身ができることに取り組んでいこうとする強い決意を述べていることに、大きな感動を覚えました。

皆さんには、この派遣事業を通して学んだことを多くの方々に語り伝えるとともに、平和で持続可能な社会の担い手として健やかに成長することを切に願っております。

結びに、所期の目的を達成され、立派な報告書を完成させた皆さんと、派遣に御尽力いただいた関係者の皆様をはじめ、御協力をいただいた保護者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本市の中學生を温かく受け入れ、全世界に向けた長崎平和宣言の中で「長崎は広島、沖縄、そして放射能の被害を受けた福島とつながり、平和を築く力になろうとする世界の人々との連帯を広げながら、『長崎を最後の被爆地に』の思いのもと、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します」というメッセージを発信された長崎市長をはじめ、長崎市の皆様の益々の御健勝と、長崎市の御発展を御祈念申し上げ、挨拶いたします。

# 目 次

## 【 事 業 内 容 】

平和へのメッセージ	1
事業概要	3
派遣団名簿	5
研修行程	6

## 【 研 修 風 景 】

集合写真	7
写真で綴る研修風景	8

## 【 団 員 報 告 】

白井 希佳	(日和田中学校)	13
佐藤 諒英	(行健中学校)	15
菅野 想太	(明健中学校)	17
朝倉 海衣	(安積中学校)	19
大平 暉	(安積第二中学校)	21
佐藤 智紗	(三穂田中学校)	23
伊藤 朱雀	(逢瀬中学校)	25
佐藤 あおい	(片平中学校)	27
古川 龍星	(喜久田中学校)	29
栗原 歩花	(守山中学校)	31
大内 彩加	(郡山第一中学校)	33
古河 未羽	(郡山第二中学校)	35
遠藤 蒼大	(郡山第三中学校)	37
龍崎 結愛	(郡山第四中学校)	39
菅野 陽太	(郡山第五中学校)	41
遠藤 喜人	(郡山第七中学校)	43
平河内 瑠奈	(緑ヶ丘中学校)	45
安齋 豪	(富田中学校)	47
佐藤 菜央	(大槻中学校)	49
津守 隆成	(小原田中学校)	51
伊藤 樹生	(宮城中学校)	53
滝田 みのり	(御館中学校)	55
大里 優誠	(郡山ザベリオ学園中学校)	57
森岡 依美伎	(湖南小中学校)	59



# § 事業内容 §



## 平和へのメッセージ

戦後 77 年を迎え、原子爆弾で亡くなられた多くの方々に哀悼の意を捧げます。

また、今なお被爆による後遺症に苦しんでおられる皆様にお見舞いを申し上げます。

貴市におかれましては、市民の皆様のたゆまぬ御努力により、原子爆弾の凄絶な被害を乗り越えられ、今日の発展を築かれました。

また、平和に対する揺るぎない御意思のもと、世界の先頭に立ち、自らが受けた惨状を日本国内はもとより世界中の人々に伝え、「世界の恒久平和」と「核兵器廃絶」の実現を目指し、積極的な活動を長年にわたり展開されておりますことに、心から敬意を表します。

終戦から 77 年が経過し、戦争や原子爆弾の恐ろしさを直接経験された方々が少なくなってきたおり、国民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、戦争や被爆の記憶を次の世代にどう受け継いでいくのかが課題となっております。

当市では、今日の平和が、多くの方々の犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを次の世代に伝えていく責務があるとの思いから、次代を担う中学生を貴市に派遣し、「戦争の悲惨さ」や「平和の持つ意義」を深く理解するとともに、被爆地を訪れ、全国から集まる同世代の仲間たちと意見を交わし合うことを目的として、様々な研修活動に参加させていただきます。

この貴重な経験を通して、参加者一人ひとりが「核兵器廃絶のために必要なこと」や「平和のために自らができること」を学び感じ取り、同世代の青少年をはじめとする多くの人々に伝えてくれるものと期待しております。

現在もなお、世界各地において武力が行使され、国際社会の平和と秩序が脅かされる事態が進行しておりますが、貴市で起きた惨禍が二度と繰り返されることのないよう、国境や民族を超えた連帯・信頼により、「核兵器のない世界」及び「世界の恒久平和」の実現に向け、不断の努力を重ねてまいります。

結びに、「核兵器廃絶」及び「世界の恒久平和」の実現を強く願いたしますとともに、貴市の益々の御発展並びに長崎市民の皆様の御健勝と御活躍を心から御祈念申し上げます、メッセージいたします。

令和 4 年 8 月 9 日

長崎市長 田上 富久 様

郡山市長

品川 萬里

令和4年9月15日

郡山市

市長 品川 萬里 様

長崎市長 田上 富久

## 平和メッセージに対する御礼

残暑の候、貴台におかれましてはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

去る8月9日に挙行いたしました「被爆77周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に際し、貴台から「平和メッセージ」を賜りましたことに、心から御礼を申し上げますとともに、貴台の平和に対する深い御理解と御協力に、重ねて感謝申し上げます。

77年前、戦争の悲惨さと原爆の脅威を身をもって体験した長崎市民は、「世界中の誰にも二度と同じ体験をさせてはならない」という確固たる思いで自らの体験を語り、核兵器廃絶を訴え続けてきました。

しかし、世界に目を向けると、ウクライナ侵略に踏み切ったロシアが、核兵器の使用を示唆したことにより、核兵器使用の危機が現実のものであることが浮き彫りになりました。

核兵器による脅威は、広島と長崎の過去の問題ではなく、世界が直面する今と未来の問題です。

私たち長崎市民は、全人類共通の願いである「核兵器のない世界」の一日も早い実現のため、平和への道を歩んでまいりますので、志を同じくする力強く大切な仲間として、今後とも共に取り組んでいただきますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、貴台のご健勝と今後ますますの御活躍を心からお祈り申し上げます。

# 令和4年度郡山市中學生長崎派遣事業 「2022 ナガサキへのメッセージ」 事業概要

## 1 趣旨

市民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを忘れてはならない。

これを次代に伝えるのが今日に生きる私達の使命であると考え、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市における平和への取り組みとして、平和の尊さや核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性を認識してもらうことを目的に、感受性豊かな中学2年生を被爆地である長崎市へ派遣して、研修活動を実施する。

また、報告会及びパネル展の開催や報告書の作成・配布等を通して、本市の取り組みについて広く市民への周知を図る。

## 2 主催

郡山市／平和を考える市民の集い実行委員会

## 3 事業内容

### (1) 派遣団結団式及びオリエンテーション

ア 開催日 令和4年7月27日(水)

イ 会場 郡山市役所特別会議室

ウ 内容 団員証交付、「平和へのメッセージ」付託、「折り鶴」付託、  
団長及び団員代表あいさつ

### (2) 派遣研修

ア 派遣先 長崎市

イ 派遣人員 団員24名、役員4名(団長、副団長、支援者、事務局各1名)

ウ 派遣期間 令和4年8月7日(日)～10日(水)

エ 研修内容

(ア) 永井隆記念館(如己堂)見学(8月7日)

(イ) 平和公園及び長崎原爆資料館見学(8月8日)

(ウ) 「平和へのメッセージ」伝達(8月8日)

(エ) 青少年ピースフォーラム(平和学習)参加(8月8日～9日)

(オ) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列(8月9日)

(3) 報告会

ア 開催日 令和4年11月26日(土)

イ 会場 郡山市役所特別会議室

ウ 内容

(ア) 派遣団員による研修報告

(イ) 被爆体験伝承者講話

(4) 写真パネル展・原爆パネル展

派遣団員が研修を通して撮影した写真に自身のメッセージを添えて展示する「写真パネル展」及び原爆に関する資料を展示する「原爆パネル展」の開催

ア 第1回

(ア) 期間 令和4年11月26日(土)～12月9日(金)

(イ) 会場 郡山市役所アートスペース

イ 第2回(予定)

(ア) 期間 令和5年2月1日(水)～15日(水)

(イ) 会場 郡山市立中央公民館

(5) 報告書

派遣団員による研修の成果をまとめた、『令和4年度郡山市中學生長崎派遣事業「2022 ナガサキへのメッセージ」報告書』の作成、配布

(6) 中学校へのパネル貸出

平和学習等への活用を目的とした、展示希望のある市内中学校への写真パネル及び原爆パネルの貸出し

# 令和4年度郡山市中學生長崎派遣団名簿

## 役員

役職名	氏名	所属
団長	山内 憲	郡山市総務部総務法務課長
副団長	吉田 泰弘	平和を考える市民の集い実行委員会監事
支援者	今泉 光一	郡山市立日和田中学校教諭
事務局	大和田 千尋	郡山市総務部総務法務課総務管理係主事

## 団員

番号	学校名	氏名
1	日和田中学校	白井 希佳
2	行健中学校	佐藤 諒英
3	明健中学校	菅野 想太
4	安積中学校	朝倉 海衣
5	安積第二中学校	大平 暉
6	三穂田中学校	佐藤 智紗
7	逢瀬中学校	伊藤 朱雀
8	片平中学校	佐藤 あおい
9	喜久田中学校	古川 龍星
10	守山中学校	栗原 歩花
11	郡山第一中学校	大内 彩加
12	郡山第二中学校	古河 未羽
13	郡山第三中学校	遠藤 蒼大
14	郡山第四中学校	龍崎 結愛
15	郡山第五中学校	菅野 陽太
16	郡山第七中学校	遠藤 喜人
17	緑ヶ丘中学校	平河内 瑠奈
18	富田中学校	安齋 豪
19	大槻中学校	佐藤 菜央
20	小原田中学校	津守 隆成
21	宮城中学校	伊藤 樹生
22	御館中学校	滝田 みのり
23	郡山ザベリオ学園中学校	大里 優誠
24	湖南小中学校	森岡 依芙伎

# 「2022 ナガサキへのメッセージ」研修行程

## 8月7日(日)

5:20集合 郡山市役所  
 5:30 出発式  
 5:40 バス  
 9:40 羽田空港  
 10:55 飛行機 ANA663  
 ※機内にて昼食  
 12:50 長崎空港  
 13:30 バス  
 14:30 如己堂・永井隆記念館  
 15:00 バス  
 15:05 城山小学校  
 15:45 バス  
 16:00 山王神社・眼鏡橋(車窓見学)  
 16:40 バス  
 17:00 宿舎  
 18:30 夕食・ミーティング  
 20:00  
 22:00 就寝

## 8月8日(月)

6:30 起床  
 7:10 朝食  
 8:30 宿舎  
 8:30 バス  
 9:00 長崎平和公園・原爆資料館(市長メッセージ伝達)  
 11:40  
 12:00  
 12:10 昼食(和泉屋平和公園前店)  
 13:20  
 14:00 青少年ピースフォーラム1日目(平和会館)  
 18:00  
 18:10 バス 宿舎  
 18:40 夕食・ミーティング  
 20:10  
 22:00 就寝

## 8月9日(火)

7:00 起床  
 7:30 朝食  
 8:45 宿舎  
 8:45 バス  
 9:15 平和祈念式典(平和公園/出島メッセ長崎)  
 11:50  
 12:10 昼食(四海楼)  
 13:10 バス  
 13:30 青少年ピースフォーラム2日目(出島メッセ長崎)  
 16:00 バス  
 16:30 大浦天主堂・グラバー園  
 18:00  
 18:30 バス 宿舎  
 19:00 夕食・ミーティング  
 21:30  
 22:30 就寝

## 8月10日(水)

7:00 起床  
 7:30 朝食  
 8:50 宿舎  
 8:50 バス  
 9:00 唐人屋敷跡  
 9:30 徒歩  
 9:40 出島和蘭商館跡  
 10:10 出島内班別行動  
 11:00 出島表門集合  
 11:10 徒歩  
 11:10 昼食(出島テラス)  
 12:00  
 12:45 長崎空港  
 14:45 飛行機 ANA786  
 16:05 伊丹空港  
 16:50  
 飛行機 ANA3181  
 17:55 福島空港  
 18:20 バス  
 19:00 郡山市役所  
 19:10 到着式  
 19:30

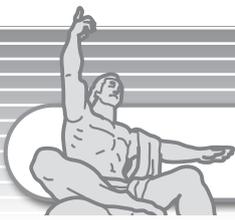
【宿泊先】 長崎にっしょうかん (所在地:〒850-0051 長崎市西坂町20-1)

# § 研修風景 §



「平和祈念像」にて





## 写真で綴る長崎派遣研修風景 ①



①7月27日に市役所で結団式を行いました。長崎での研修に向け、団員が気持ちを一つにしました。



②8月7日朝、市役所で出発式を行いました。団員代表の大平さんが研修に向けての抱負を發表しました。



③長崎に到着。如己堂・永井隆記念館を見学しました。自らも被爆しながら平和を願った博士の生涯に感銘を受けました。



④爆心地から約500mの距離にあった旧城山国民学校では、爆風による爪痕の残る校舎で資料を見学し、原爆の被害の大きさを知りました。



⑤城山小学校の現在の校舎の前に設置された少年平和像や嘉代子桜など、平和の願いが込められた様々なものを見学しました。



⑥国の重要文化財に指定されている現存最古のアーチ型石橋の一つである眼鏡橋を見学しました。



⑦2日目、原子爆弾落下中心地。原子爆弾で犠牲になられた方々の冥福を祈り、黙とうを捧げました。



⑧爆心地公園にある被爆当時の地層。破壊された家の瓦や溶けたガラスなどが大量に埋没しており、当時の悲惨な様子を実感しました。



⑨原爆資料館を見学しました。原爆投下の経緯・被爆の惨状・平和を希求する人々の思いに触れました。



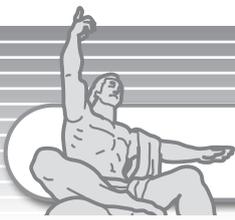
⑩原爆被害の学習後、普段、原爆死没者名簿が納められている平和祈念館の追悼空間で平和への祈りを捧げました。



⑪品川市長から長崎市長への「平和へのメッセージ」を、派遣団の代表が原爆資料館篠崎館長に届けました。



⑫青少年ピースフォーラム 1日目。被爆体験講話では、山田一美さんの貴重な体験をお聴きし、原爆の無差別性、非人道性を知りました。



## 写真で綴る長崎派遣研修風景 ②



⑬ピースボランティアの方の案内で平和会館周辺を巡るフィールドワークを行いました。



⑭市民の皆さんから託された千羽鶴を団員代表の佐藤さんが奉納しました。



⑮3日目。8月9日。平和祈念式典に参列しました。平和公園で挙行された本式典に、10名の団員が参列しました。



⑯中継会場の出島メッセ長崎会場で参加した生徒たちは、献花を行い、ハンドベルの演奏や詩の朗読を聴きました。



⑰青少年ピースフォーラム 2日目。全国から集まった仲間たちとケンカ・戦争の原因と解決策等について話し合いました。



⑱青少年ピースフォーラムの最後に全員で記念撮影を行いました。



⑱世界遺産に登録された大浦天主堂を見学し、長崎の歴史と文化に触れました。



⑳国指定重要文化財に指定されている住宅が集まったグラバー園を見学しました。



㉑3日目のミーティング。吉田副団長から青少年ピースフォーラムの修了証書が一人一人に渡されました。



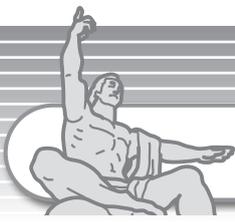
㉒今泉先生にアドバイスをいただきながら、報告会の発表内容や役割分担などについて話し合いました。



㉓4日目。前日に平和祈念式典が行われた平和公園で、平和の鐘や平和の泉を見学しました。石碑の碑文などを真剣に読んでいました。



㉔江戸時代、鎖国後の出島と同じように、唐人たちが居住していた唐人屋敷を見学し、長崎の歴史について学習しました。



## 写真で綴る長崎派遣研修風景 ③



②鎖国時代、西洋に開かれた唯一の窓口であった出島を見学しました。ヨーロッパとの貿易の歴史に触れました。



⑥郡山に到着し、市役所で到着式を行いました。団員代表の滝田さんが今後に向けての決意を述べました。



⑦1班団員（左上から）大平暉、遠藤蒼大、津守隆成、（左下から）滝田みのり、白井希佳、龍崎結愛（班長）（敬称略）



⑧2班団員（左上から）佐藤諒英、古川龍星、大里優誠（班長）、遠藤喜人、（左下から）佐藤智紗、平河内瑠奈、大内彩加（敬称略）



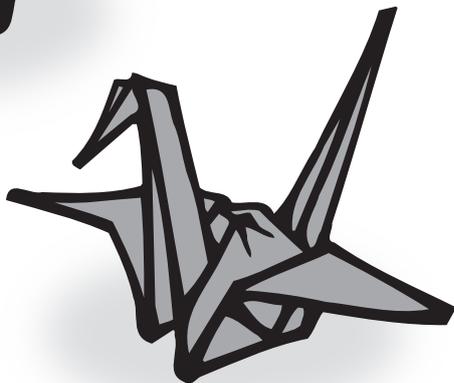
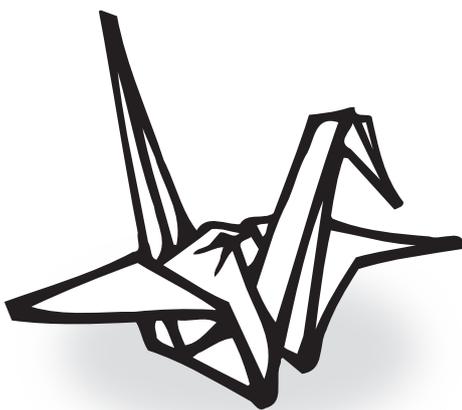
⑨3班団員（左上から）菅野陽太、伊藤朱雀、伊藤樹生、（左下から）栗原歩花、朝倉海衣（班長）（敬称略）



⑩4班団員（左上から）安齋豪（班長）、菅野想太、森岡依芙伎、（左下から）古河未羽、佐藤菜央、佐藤あおい（敬称略）

§ 團 員 報 告 §





# 世界平和の一步へ



郡山市立日和田中学校2年 白井希佳

## 1 派遣研修への参加に当たって

今年ロシアがウクライナに侵攻し、テレビのニュースで悲惨な姿が報道されていたのを何度も目にした。過去に日本でも広島と長崎に原爆が投下されていた事は知っていたが、被害状況や、原爆がどのような被害をもたらしたのかについては知らなかった。先生から長崎派遣があると伺った時「当時の長崎がどのような被害や、人体に影響をもたらしたのかについて、詳しく知れる機会だ」と思い、この長崎派遣に参加した。広島には原爆ドームがあることは知っていた。だが、長崎には、どのようなものがあるかは知らなかった。この研修を通して長崎に投下された原爆がどのような被害をもたらしたのかを知り、次世代の子どもたちに伝えていきたいと思った。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 長崎原爆資料館

原爆資料館には、実際に長崎に投下された「ファットマン」のレプリカや、原爆が投下された時の映像、被爆した人の写真が展示されていた。私は、レプリカを見た瞬間言葉を失った。レプリカが、想像以上に大きかったからだ。このたった一つの原子爆弾が長崎に投下され、幼い子どもたちの命を奪い、沢山の死者や、負傷者が出たという事実に言葉を失い、考えさせられた。そして、今、世界で起きている戦争が、一刻も早く終わってほしいと思った。

### (2) 平和祈念式典

8月9日、私は出島メッセ長崎で平和祈念式典に参列した。その中でも、田上富久長崎市長の「長崎平和宣言」が心に響いた。今の状況の中でも被爆者の方々が経験したことを世界の人達に伝えており、また、核兵器廃絶を被爆者の方と一緒に求めているからだ。私は、「長崎を最後の被爆地に」という願いを込めて午前11時2分、長崎の鐘が鳴り響く中、被爆して亡くなってしまった被爆者の方達に黙とうを捧げた。

### (3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、8月8、9日の2日間にわたって日本全国各地から集まった小中高生と意見交換や、こじんまりフィールドワーク、そして被爆体験講話が行われた。意見交換では、「けんかはなぜ起こってしまうのか」やその解決策を班ごとに話し合った。私達が友達と喧嘩した時のように、戦争も小さなすれ違いから起きるのだと学ぶことができた。そして、実際に戦争の疑似体験をした。戦時下の身の守り方も実際に教えてもらった。私は、実際に戦争が起こっていたときに、被爆者の方々を含めてこんな思いをしていたと思うと、胸が痛くなった。ウクライナでも、こんな思いをする人がいなくなってほしいと思った。全国各地の人と交流し、学んだことを次に生かし、伝えていきたいと思う。



＜全国各地から平和を祈り奉納された千羽鶴＞

### 3 心に残ったこと

この写真は、平和公園内にあった数々の千羽鶴の写真である。私たち郡山市中学生長崎派遣団も千羽鶴を奉納した。だが、私たち派遣団以外にも、平和を祈り、たくさんの千羽鶴が並んでいた。私は、「今このような状況の中でも、たくさんの人達が心から平和を願っている」と感じた。世界には、まだまだたくさんの核兵器を保有している国がある。ウクライナへ侵攻しているロシアは世界で1番核兵器を保有している国だ。私は、「世界の何処かの国が核兵器を使用しても、自分の国には影響はないのでは」と考えてしまうことがあった。だが、今回の研修で「世界の何処かの国が核兵器を使用してしまうと、世界全体に影響が出てしまう」ということを分かる事ができた。私以外にも、こう思っている人がいるかもしれない。その人達にも、平和の大切さを知ってほしいと思った。そして、これからの社会で核兵器を使わない、そして作らない世界になってほしいと思った。私たちができることは数少ないが、語り継いでいき、平和の輪を広げていきたい。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣へ参加して、当時の長崎の状況をよく知ることができ、いい機会になったと感じた。教科書に記載されていないことまで分かる事ができたからだ。戦争がどれだけの人々の尊い命を奪ったか、そして、原爆がどれだけの威力だったのかを実際に現地へ行き、学べたことはとても良い経験になったと思った。また、貴重な被爆者の方からの話を聞くことができた。私たちが聞いた話を次世代の子どもたちに語り継いでいくバトンが渡されたと感じた。そのバトンを止まることなく、子どもたちに伝えていきたいと思っている。子どもたちは、戦争があったことや、広島や長崎に原爆が投下されたことを当然知らない。「知らないからこそ私たちが語り継がないといけない。」私たちに重要な役割が任されたと思った。そして、これからの世界がずっと「平和でありますように」という願いを込めて伝えていきたいと思う。

# 平和への誓い



郡山市立行健中学校2年 佐藤 諒 英

## 1 派遣研修への参加に当たって

私が派遣研修に参加したきっかけは、広島の実験原爆についてはテレビなどでよくやるため知っていたが、長崎の実験原爆がどれくらいの被害だったかをよく知らなかった。その為、この機会に色々な事を勉強して、郡山市だけでなく福島県全体に知ってもらわなければならないかと思っただけからだ。

また、同じ核を使用した原子力発電所がある福島県民として、核の恐ろしさなどを学ぶ事によって、これから核で苦しむ人が少しでも減らせる様にする為にこの研修に参加しようと思った。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 原爆資料館

衝撃的なものだった。焼け焦げた人、熱線を受けた人の写真、ファットマンの実物大の模型、午前11時2分を示したまま止まってしまった時計など被爆当時の資料が約1,500点展示されていた。その中で一番印象に残ったのは、原子爆弾の実物大の模型だった。

1つの爆弾で約7万人の命を奪ったと考えるとこれまでに感じた事のない恐怖を感じた。

### (2) 青少年ピースフォーラム

2日間の研修で全国の小中学生、大学生と平和についての意見交換を行った。

1日目は被爆当時10代だった山田さんの話を聞いた。一日中空襲が鳴りやまない日が続いたり、学校ではいざという時のために毎日避難訓練をしていたりという当時の貴重なお話を聞くことができた。山田さんはこう言っていた。

「何があっても物事を武力で解決しようとす

るのはよくない。武力を行使してしまえば、あの悲劇が繰り返されることになってしまうから。」

2日目、私達の班は、「なぜケンカは起きるのか」という議題について話し合った。その中で、相手の意見を尊重しないから、自己中心な人がいるからなどといった意見が出た。その結果をふまえて、自分に出来る事をお互いに発表し合った。

これからは「相手の気持ちや人によって、それぞれ意見が違うことを意識してみんなでより良い生活にしていく」その事を心がけていこうと思った。

### (3) 城山小学校

城山国民学校は爆心地から、西方500mの場所にあり、最も爆心地から近い国民学校だった。当時は鉄筋コンクリート3階建てだったが原爆により大きく破壊されて、2、3階は全焼してしまった。しかし、被爆しながらも残った旧校舎の一部は貴重な被爆遺産として保存公開されている。原爆当時は夏休みだったので約1,500人の児童のうち1,400人余りが家庭で亡くなったと推定されている。学校にいた教職員31人のうち28人が亡くなられた。被爆した建物が今もなお資料館として残っていて驚いた。また、城山小学校には少年平和像というものがあり、それは原爆で全てを失った児童が平和を祈り何度も立ち上がる姿をかたどったものである。そこには、何が起きても諦めようとしなかった城山小学校の児童らの強い思いが込められていた。



< 像に込められた平和への願い >

### 3 心に残ったこと

私は、平和祈念式典に出席することができた。なかなか出席できるものではなかったのが、大変貴重な経験だった。その中で、いろいろな話を聞くことができたが、一番心に残ったことは長崎市長の「長崎平和宣言」だった。

その中に、こんなお話があった。

1945年に開かれた原水爆禁止世界大会で、被爆者の渡辺千恵子さんが会場に入ると一斉にフラッシュがたかれたそうだ。16歳の時に被爆して崩れた鉄骨の下敷きになって以来、下半身不随の渡辺さんをお母さんが抱きかかえて入ってきたからだそうである。すると、「見世物じゃないぞ!!」という声が発せられ、その場は騒然としたということだ。渡辺さんは「世界の皆さん、どうぞ私を写してください。そして二度と私をつくらないでください。」とおっしゃったそうだ。

この話を聞いたとき私は「核兵器を絶対に使ってはならない」「戦争を起こしてはならない」という渡辺さんの全身全霊の叫びに感動した。また、平和祈念式典に参加したひとりとして、核兵器廃絶の呼びかけをしなければならぬと心の底から感じた。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

今回、4日間の派遣研修に参加して、原爆の被害の大きさ、戦争の被害や核兵器の恐ろしさ、被爆された方々は今どのような活動をしているのかを詳しく知ることができた。また、これらはこの世界に絶対に必要のないものだとも思った。そして、様々な体験や学習をとおして、今でも核兵器を持っている国があることを知り、少し怖くなった。

被爆者の平均年齢が84歳を超えたいま、被爆当時の様子を聞くことができたのは、本当に貴重な体験だった。被爆された方々は私たちが想像することもできないくらい苦しい日々を過ごしてきたと思った。戦争がだんだん風化してきている中、様々なお話を聞いてきた私たちが何か行動をしなくてははいけないとも改めて思った。

今回の派遣事業に参加したのは、自分の見聞を広めるだけではなく、学校の先生や友達・家族にも学んだことを伝えたかったからである。

世界では現在も戦争がおきている。とても悲しいことだと思う。あの悲劇が二度と起こらないように、今回直接肌で感じたものや目で見ただけのものを、これから先私たちがどのようにすればいいか考え、今回学んだことを後世に伝えなければならぬと深く思った。

# 笑顔で暮らせる世界に



郡山市立明健中学校2年 菅野想太

## 1 派遣研修への参加に当たって

僕が今回の長崎派遣事業に参加しようと思ったきっかけは、大きく2つある。一つ目は、歴史の授業で、長崎原爆投下直後のきのこ雲の写真を見た時、とても現実で起こったこととは信じられなかった。一目見た時は、その脅威について分からなかったが、「原爆は恐ろしい」という事だけは頭に残った。学校の授業だけでは分からない、長崎原爆投下の真実を知り、そこから学びたいと思ったからである。

もう一つは、僕の親戚のおじさんが長崎県出身だったことである。おじさんは、戦時中に生まれ、戦争を経験した。おじさんの実家は、爆心地から離れた大村市にあったので、幸い被爆は免れたのだが、心には戦争という深い傷が記憶として残った。長崎派遣事業に参加することが決まる少し前におじさんは亡くなってしまったが、僕もその地を踏んでみたいと思ったからである。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 城山小学校

被爆前は、2,000人以上が通っていた、旧城山国民学校。被爆時の校舎は、鉄筋コンクリートでできていたことと、爆心が垂直方向にあったため、爆風による被害が比較的少なかったために、倒壊せず残った建造物である。原爆投下当時は、1,500人の生徒と、31人の先生がいたが、原爆投下で、生徒1,400人と28人の先生が亡くなった。校舎内には、生徒や先生の遺品や、被爆当時の写真などが展示されており、原爆の悲惨さを物語っていた。その中でも、城山小学校に被爆以前からあった、一本のカラスザンショウの木には驚かされた。原爆の熱線と

放射線で、幹の色は著しく変色し、表面部分は一部ボロボロになっている部分もあったが、この木は何と爆風で倒れずに、「立ち枯れ」という状態だったという。

この木と学校は、まさに原爆の脅威を表していて、これらこそが、大きな一つの「遺品」なのである。

### (2) 平和祈念式典

8月9日、平和祈念式典に参列した。投下された時刻、午前11時2分に原爆死没者追悼の意を込め、黙とうをささげた。その間、公園中に長崎の鐘の音が鳴り響き、おのずと、平和を願う死没者の声が聞こえた気がした。

式典では、被爆者の話も聴くことができた。一瞬、ピカッと激しい光線が出たと思ったら、そのあとドンっという音とともに、熱線や爆風が人々を襲った。皮膚は熱線でただれ落ち、建物は黒く焦げ、地面のいたるところに遺体がゴロゴロあった。そんな悲劇が、被爆77年の月日を経て、僕の心に刺さった。原爆の恐ろしさを一番知っているのは、被爆者本人であり、その声を聴ける貴重な機会となった。

そして、公園のシンボルである平和祈念像は、優しい青緑色をして、市民を見守る守護神のようだった。天高くつき上げた右手は「原爆の脅威」を、横に伸ばした左手は「平和」を意味している。まさに、未来の平和都市長崎をつくる「街のシンボル」であるとともに、原爆死没者を慰霊する「平和のシンボル」であることが、胸に刻まれた。



＜ 原爆資料館内に展示されている原爆投下直後の写真 ＞

### 3 心に残ったこと

原爆資料館には、原爆投下直後の写真や、遺品などが数多く展示されていた。遺品の中には、クリスチানের多い長崎特有のロザリオが溶けてしまったものや、人骨が溶けてへばりついた瓶など、ありのままの状態で見せられていた。これらを目の当たりにして、一発の原爆が長崎の街を破壊しつくしたのかと思うと、強いショックと恐怖に襲われた。上部の写真は、展示写真の一つで、原爆投下後の長崎市民を撮影した写真である。けが人もいれば、病人もいる。老人もいれば赤子もいる。人々のこれまでの営みを想像すると、とても直視できる写真ではなかった。だが、僕達と同じ人間がしたことだから目を背けてはいけないと思い、受け止めた。写真に写る赤子は、母の乳を必死に飲もうとするが、その力もなく数日後に亡くなったと書いてあった。人々の人生を壊し、笑顔を奪う核は、必ず廃絶すべきだと思った。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の長崎派遣事業を通して、僕は、平和の尊さや戦争の悲惨さを学び、被爆者の声を聴いた。また、「長崎を『第二の被爆地』ではなく『最後の被爆地』にしなくてはならない。」この言葉の意味と、それに込められた願いが深く理解できた。自然や人間を破壊する核兵器や武力に訴える行為は、絶対に許されるべきではない。しかし、現在の世の中でも、核兵器による脅威は続いている。また、貧困にあえいでいる国や、宗教の因果関係で紛争が絶えない地域などがまだまだたくさんある。日本はどうだろうか。戦争は起きていなくても決して平和な国だとは断定できない。「平和」とは一体どういう状態を言うのだろうか。漠然としてはいないか。また、一人ひとりによって「平和」の捉え方に違いがあると僕は思う。だからこそ、永井隆博士の言葉にあった「如己愛人」の心を広めていきたい。また、被爆者の吉田さんが語っていた「平和の原点は人間（ひと）の痛みが分かる心を持つことです」この言葉の通り、互いを尊重し相手の立場に立って考えることを実行していきたい。僕は将来、歴史学者になることを志している。この経験を活かして、歴史の背景にある人々の声に耳を傾け、それを発信できるような歴史学者になって、核のない、全ての人々が笑顔で暮らせる世界をつくることに貢献していきたい。

# 戦争のない世界を



郡山市立安積中学校2年 朝倉海衣

## 1 派遣研修への参加に当たって

私は、小学4年生の時に家族旅行で長崎を訪れたことがある。その際、平和公園や長崎原爆資料館も訪れたが、その時は、原爆や戦争について「何となく」しか感じるができなかった気がする。

そこで、私はこの派遣事業に参加し、世界で2番目の原子爆弾の被爆地である長崎の歴史や、長崎に落とされた原子爆弾についてもう一度深く学び、見聞を深め、同年代の人たちと意見を交わしたり、交流を深めたりしたいと考えた。

また、当時の状況や歴史を知るための城山小学校、一本柱の鳥居や長崎を代表する大浦天主堂、グラバー園などの建造物の見学、皿うどんやカステラなど長崎の食文化にも触れてきたいと思い参加した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、11時2分を指したまま止まっている時計や頭蓋骨の付着した鉄かぶと、長崎型原爆「通称ファットマン(太っちょ)」の実寸大模型、原爆の被害にあった人や動物や物の無残な姿など目をそむけなくなる展示物がたくさんあった。その中でも爆風によって折れたり裂けたりした木や、熱によって沸騰し泡立った瓦が、爆風の強さや熱線による熱さを物語っていた。それらの展示物を見ていると、そこに住んでいた人たちの何気ない幸せが一瞬にして奪われ、今もなお、その原子爆弾が世界に1万個以上あり、その上当時の半分の大きさでも何百倍もの威力があるものに改良されているかと思うと、怒りが沸き出てくる。

### (2) 平和公園・爆心地公園

平和公園に訪れた際に私が最も印象に残ったのが、平和祈念像である。平和祈念像のあの特徴的なポーズには意味があり、天を指す右手は原爆の脅威を、水平に伸びた左手は世界平和をそれぞれ表している。そして、この祈念像は真正面ではなく、爆心地公園の方を向いている。平和公園には他にも平和の泉があり、犠牲者の冥福を祈り、平和を祈念するために建設された。爆心地公園には原子爆弾落下中心地碑が建設されており、今までに原爆の被害で亡くなられた方の人数が記されている。公園から川沿いに降りた所では、被爆当時の地層を見た。その地層には湯呑みやお茶碗、泡立った瓦が埋もれており、原爆の威力が目に見えて分かった。他にも、原子爆弾落下中心地碑の隣には大浦天主堂の原爆で崩壊した際に残った柱が移設されてある。

### (3) 平和祈念式典

私は、今まで一度も平和祈念式典を見たことがなかった。テレビでも見たことはなかった。授業で戦争や原爆のことを学んでも、それは歴史のことであり、自分には関わりがないと思っていた。これは、なぜ多くの被災者の方々が式典に参加するのか、国や被災県の長が未来に向けてどのような決意やメッセージを送るのか、ということに関心がなかった表れだと思う。

しかし、今回中継ではあったがリモートで式典に参加し、核兵器は減らしたり、使用しないようにしたりするだけではなく、廃止する必要があると思った。そして、「微力だけど無力じゃない」という長崎市長の言葉を、私も合言葉にしていこうと思った。

### 3 心に残ったこと

右の写真は、城山小学校にある「少年平和像」である。この像は、原爆で全てを失った城山小学校の児童が、平和を願って立ち上がる姿をかたどったものである。少年は、父親のズボンを、裾をまくってはき、ウエストをベルトの代わりに紐で結んでいる。左手には、平和の象徴である鳩が乗っている。この像のモデルの少年は当時5年生で、父母を原爆によって亡くした。そして、少年のいる台座には、当時6年生だった菅原耐子さんの字で「平和」と書かれている。少年平和像の周りには、各地から集まったと思われるたくさんの千羽鶴があった。この千羽鶴から、平和を願って立ち上がった当時の小学生のためにも、「二度とこの悲劇を繰り返してはいけない」と感じている人が、長崎だけでなく日本中、そして世界中にいることを感じた。

その反面、世界中に核を保有している国の多さを改めて思い起こした。核兵器を保有している以上、最終手段として使うことが前提であるように思う。

使用を前提としてなくても、核兵器を発明してしまったことが人類の過ちであったように、発明家が「絶対に使用してはならない」と言っても受け入れられずに使用されてしまったように、また、いつ使用されてしまうかわからない。

そのようなことが二度と繰り返されることのないように、核兵器のない世界が実現し、この長崎が最後の被爆地になって欲しいという強い思いを、この像から強く感じた。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

長崎原爆資料館内にある、被爆者の方々の当時の体験談をまとめた黒本を朗読していただいた内容が、派遣研修の中で印象に残った。朗読してくださった方によるとその方は、7歳の時に被爆し、被爆した際に家族を探した。家があった場所には母親と弟の遺体があり、諦めて妹を探した。探している時、目玉が飛び出た小さな女の子の遺体があったが、こんなに気持ちが悪いのは妹ではないと思い他の場所を探した。しかし、妹は結局見つからず、77年経った今、「あの子は妹だったのではないか?」「誰かが無事に火葬してくれただろうか?」と、今もうなさ



＜ 少年平和像 ＞

れているようだ。70年以上も苦しめ続ける原爆に、怒りが止まらない。

私は今回、被爆者の方から直接話を聴くことができた。しかし、被爆者の方々の平均年齢が上がっており、実際に原爆の恐ろしさを経験した方から話を聴ける機会は少なくなってきている。

そんな中、私にできることは何だろうか。それは、「伝えること」「話すこと」だと思う。「被爆地の人だけでなく、日本、そして世界中の人たち一人ひとりが平和を守る立場にあること、またその責任があること。」「世界中から核兵器がなくなり、戦争のない平和な世界を何十年、何百年と守り続けて行かなければならないこと。」「核兵器の恐ろしさ、悲惨さ、そして平和の尊さ。」

「微力だけど無力じゃない」ということを心に秘め、恰好をつけたきれいごとではなく、自然に語り合う時間を友だちと持てること。そんな「平和への第一歩」を私も踏み出したい。

# 平和への一歩



郡山市立安積第二中学校 2年 大 平 暉

## 1 派遣研修への参加に当たって

2022年2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。ウクライナの街は戦場となり、たくさんの犠牲者が出た。それまで僕は、戦争というものとは昔起こったことで、今の平和な時代とは関係ないと思いついていた。しかし、この戦争が起こったことにより、平和が当たり前ではないことに気付かされた。

そして今回、長崎派遣事業への参加を希望したのは長崎に投下された原爆やその後の復興について強い関心があったことと、世界平和の鍵となる核兵器廃絶の大切さを学び、多くの人に伝えたいと思ったからだ。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館の中には、原爆が投下された時刻を示す11時2分で止まった時計や熱線によって溶けた瓶、炭化した小麦など当時の被害の様子を知ることができるものがたくさん展示されていた。また、放射線によって内臓が腫れている被爆者の方の写真もあった。

特に印象に残ったのは、77年前の8月9日に長崎に投下された原爆「ファットマン」の実物大の模型を見学したことだ。それは想像していたものより小さかった。しかし、この原爆が長崎を一瞬にして焼け野原にし、7万人の命を無差別に奪ったことに、とても恐怖を感じた。

長崎原爆資料館を見学したことは、僕にとってとても重要なことだったと思う。そして、現在世界にある12,000個以上の核兵器の廃絶を訴え続けていくことが僕たちの使命だと感じた。

### (2) 平和祈念式典

僕は出島メッセ長崎で平和祈念式典に参列した。平和祈念式典は、今回で最後の活動になった被爆者歌う会「ひまわり」の合唱から始まった。

僕は「もう二度と作らないでわたしたち被爆者を」という歌詞が心に残った。その歌詞からは、被爆者の方の切なる願いを感じ取ることができた。その後、長崎の鐘が平和公園に鳴り響く中、原爆が投下された11時2分に合わせ、黙祷が捧げられた。僕はその時に「核兵器をこの世からなくし、平和が当たり前の世界になってほしい」と心から願った。この想いは決して忘れてはいけないと心に刻んだ。

### (3) 青少年ピースフォーラム

平和会館ホールと出島メッセ長崎にて、青少年ピースフォーラムが2日間行われた。全国から同世代の人がたくさん集まり意見交換を行った。

1日目は被爆体験講話を聴いたり、「こどもまりフィールドワーク」を行ったりした。特に印象に残っているのは、被爆体験講話で、長崎に原爆が投下された時の様子を、直接体験された方から伺ったことだ。当時、ほとんどのものを戦争で失い、苦しんだという悲惨な状況を聴くことができた。とても貴重な経験になった。

2日目は、班に分かれ「けんかが起こる原因」「けんかにならないようにするためには」という課題について意見交換をした。けんかが起こる原因は、ちょっとした意見の食い違いや欲望など理由は様々だ。それが国同士だと戦争に発展することがある。そのため、日頃から相手の気持ちを考え、暴力ではなく話し合いで解決することが大切だと考えた。



< 少年平和像 >

### 3 心に残ったこと

僕にとって最も印象的だった場所は、城山小学校（旧城山国民学校）である。城山小学校は爆心地よりわずか500メートルの所に位置している。上の写真は、城山小学校の校門の前にある「少年平和像」の写真だ。この像は、戦争、原爆で、すべてを失った児童が平和を希求して立ち上がる姿を表したものである。

僕は、原爆が投下される前の城山小学校の姿を資料館で見てから、城山小学校旧校舎を見学した。そのため、美しかった校舎が口では言い表せないほど焼け焦げていたことに言葉を失った。原爆により1,400人余りの児童と職員の尊い命を失った当時は、その全てが悲しみや苦しみに満ち溢れていたに違いない。そう考えると、心が締め付けられるように苦しくなった。少年平和像からは、幼くして悲劇にあった子どもたちの想いを現代に伝えようという切なる願いが感じられた。子どもたちは戦時中、臨時の兵器工場などで国のために働いていた。自分の作った兵器がたくさんの大切な命を奪ってしまうことを、子どもたちはどれほど悩み、どれほど苦しんだかを想像すると、このような戦争は、何があっても絶対に繰り返してはいけないと確信した。

現在、城山小学校の児童は、少年平和像に毎日あいさつをしているという。私は日々の積み重ねから、戦争の記憶を伝えていく必要性を体感している。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

僕は今回の長崎派遣事業を通して、「平和」に対する考え方を変えることができたと思う。長崎に行くまでは、核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さを理解してはいたものの、長崎原爆資料館の見学や街に残る遺構などを見て、改めて戦争や核兵器の恐怖を肌で感じる事ができた。核兵器は人間が作ったものだが、一瞬にして多くの人の命を奪い、罪のない人々に対して悲劇をもたらす。今すぐに核兵器をなくすことは不可能だが、なくすために行動することはできる。だからこそ、少しずつ平和に向けて、忍耐強く努力することが必要だと思う。「戦争は誰のためにもならない」「核兵器はこの世から必要ない」という言葉を胸に刻んで、平和への一歩を踏み出したい。

この4日間、世界で最後の被爆地である「ナガサキ」で学習したこと、考えたこと、同じく平和を願う仲間と共に過ごしたことは、とても貴重な経験になった。さらに、僕にとってかけがえのない思い出になったと思う。関わってくださった全ての方に感謝したい。

僕はこの事業に参加して平和に関する多くのことを学んだ。そして、今回得た知識を多くの人々に、正しく発信していきたいと思う。長崎で、目で見て、耳で聴き、肌で感じたことを正しく伝えることが未来を担う僕たちの役目だと思う。

もう二度と辛い思いを繰り返さないためにも。

# 平和な未来へ……



郡山市立三穂田中学校2年 佐藤 智 紗

## 1 派遣研修への参加に当たって

「日本は唯一の核爆弾被爆国であり、長崎は核爆弾が落とされた都市のひとつである。」社会の授業等でその事実は知っていた。しかし、今まで私は平和な世の中に生き、あまり他の県に関心を持っていなかったため、まるで遠い国の出来事のように「日本は唯一の被爆国」という実感も、長崎についての知識も全くない状態だった。

そんな中、ロシアとウクライナの戦争が始まった。ニュースで毎日のように見る戦場の光景。鳴り響く発砲音。「戦争はこんなにも怖いのか。」私はテレビを通して生々しく写る戦場の光景を目にし、そこで初めて「戦争」が、「死」が身近にあることを実感した。

そこで、かつての日本で行われた戦争について詳しく知ることができる長崎派遣への参加を決意した。

## 2 派遣研修に参加して

初めて訪れた長崎は美しい景色があふれており、ここに原爆が投下されたとはとても思えなかった。

### (1) 原爆資料館

原爆資料館には原爆に関する貴重な資料が多く展示されていた。その中でも私が特に印象に残っているのは、当時の様子を鮮明に写した写真だ。

熱線によって草一つすら生えていない爆心地、爆風によって吹き飛ばされた家屋、高温にさらされ焼け爛れた皮膚の人々…。おもわず目を背けたくなるような光景ばかりだった。写真は白黒で印刷されているため、焼けた人々は皆真っ黒に写されていたが、実際は真っ赤になっていたのだそうで、それを想像すると、とても

胸が苦しくなったのを覚えている。

また、原爆投下後も放射線の影響により病気になってしまい亡くなった方も多くいたそうだ。「次は自分が病気になるかもしれない。」そんな不安と恐怖を抱えながら生きていたのか…、と戦争の悲惨さと、戦争・核兵器がもたらす大きな影響を再確認し、平和の尊さを学ぶことができた。

### (2) 平和祈念式典

平和祈念式典では、ハンドベルでの演奏や被爆者の方たちの合唱、長崎平和宣言などが行われた。私は、別会場でスクリーンを通して式典の様子を見ていたが、たくさんの方が恒久平和の実現を長崎から世界へ訴えていた。

今、被爆者の方たちの平均年齢は84歳を超えており、原爆当時の様子や被爆体験を語り継ぐ人たちが減ってきている。そんな中、実際に見て、聴いて、学ぶ機会を頂いた私たちが、次世代へと語り継いでいく番なのではないかと強く感じた。

### (3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、長崎のピースボランティアの方々、全国から集った学生の方々と一緒に平和について学ぶことができた。皆がとても親身に接してくれたので、とても楽しく参加できた。

私が特に印象に残っているのは、1日目の「戦争体験」だ。大きな音で警報が鳴る様子はとても怖かった。自分の大切なものを書いたカードがどんどん無くなっていき、最終的には全てのカードが無くなってしまった。「大切なものは戦争によってこんなにも簡単に無くなってしまおうのか。」と悲しさがこみ上げてきた。戦争の怖さを肌で感じ、実感することができた。



< 原子爆弾落下中心地碑 >

### 3 心に残ったこと

上の写真は原子爆弾落下中心地碑である。ここには爆死された方々や、被爆者でその後亡くなられた方々の氏名が奉安されている。名前の通り、原爆はこの場所の上空約 500 メートルで炸裂し、多くの人の命を奪った。

たった一瞬ですべてを変えてしまう核兵器。あの日、この日本に、この長崎にそれが落とされてしまうなんて誰が想像できただろう。多くの尊い命が奪われ、平和を脅かす戦争はこれから先、絶対に起こしてはならないと思う。そのために私たちが責任をもって「戦争は起こしてはいけない」こと、「平和な未来を築かなくてはならない」ことを伝え、広めていかなければならないと思った。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

私は今回、この派遣研修に参加して、「自ら進んで学ぶ姿勢の大切さ」に気が付いた。これまでは、戦争についてテレビのニュースや、社会の授業などで知ったつもりになっていた自分がいた。4日間の研修を通し、自ら進んで学習し、さらに学びを深めることが大切であると強く感じた。

私はこの研修に参加したことで貴重な体験をする事ができた。それにより戦争を身近に感じ、戦争の怖さや、平和の尊さなど様々なことを考えることができた。終戦から 77 年。今なお世界のどこかでは戦争によって苦しんでいる人たちがいる。この時代に生きる私たちが今できることは、「広め、知ってもらおう」ことだと思う。一人でも多くの人に広め、知ってもらい、平和な未来を皆で築きあげていきたいと思う。

# 平和とは



郡山市立逢瀬中学校2年 伊藤 朱雀

## 1 派遣研修への参加に当たって

最近よく流れるロシアのウクライナ侵略のニュースから、私は戦争に対する関心を強くもった。そのような中、実際に原爆の被害があった長崎に行き、戦争や原爆がもたらした被害の跡を五感で感じ、又、原爆に対する想いをより深め、その想いを家族や友人、郡山市と逢瀬町の方々に伝えたいと思い今回の研修に参加した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 原爆資料館

それらを見た時は言葉を失った。被爆し、皮膚が焼け落ちた少女の写真、放射線の影響により髪の毛が抜け落ちた人の写真、実物大のファットマンの模型、原子爆弾の熱線で溶けてくっついた6本のガラス瓶など原爆の悲惨さを語る資料が1,500点以上あったからだ。

その中で特に印象に残ったのは、被爆し皮膚が焼け落ちた少女の写真だ。この写真が今でも頭から離れない。あまりにも悲惨すぎて目をそらした。原爆の恐ろしさを改めて突き付けられ、核兵器廃絶への思いがより深まった。

### (2) 青少年ピースフォーラム

2日間の研修を行い被爆した山田一美さんの講話や全国から集まった小中学生と大学生のボランティアの方々と平和についての意見交換を行った。被爆者の山脇さんは、原爆投下直後の事をこのように語っていたそうだ。「そこには目をつぶったまま走り去りたいほどの光景が広がっていた。でも、遺体の隙間を探して歩くのがやっとだった。」この話を聞いて原爆による被害の悲惨な光景がより鮮明に頭に浮かんだ。そして原爆に対する恐怖や怒り、悲しみを強く

感じた。最後に「長崎を最後の被爆地に。核兵器の無い本当に平和な世界にしてほしい。」と、私たちに訴えていた。講話を聴き、被爆した方々の思いを次の世代に伝えていく事が私たちの役目だと思った。

意見交換会では、争いが起こる理由やその解決策について話し合った。色々な考えをもった方々と意見を出し合って、今まで以上に深く平和について考えられた。「誰か」ではなく「みんな」で平和な世界について考える事が大切だと思った。

### (3) 平和祈念式典

8月9日、平和祈念式典に参列した。午前11時2分、平和の鐘が鳴り響く中、黙とうをした。私は「長崎を最後の被爆地に。今後核兵器が無い本当に平和な世の中になってほしい。そして皆が笑って暮らせる毎日になってほしい。」と心の中で何度も何度も願った。

その他にも平和祈念式典では、被爆者の方々による「千羽鶴」の合唱があり、被爆者の方々の「長崎を最後の被爆地にしてほしい。核兵器を無くしてほしい。」という思いがとても伝わってきた。

私はこの研修を通して、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを強く感じる事が出来た。この学んだ事を次の世代、多くの人々に伝えていきたいと思っている。



＜ 如己堂 ＞

### 3 心に残ったこと

この「如己堂」は、永井隆博士が被爆後、3年間住んだ2畳ほどの小さな家である。永井隆博士はこの原爆の影響により寝たきりになってしまう。また、永井隆博士は2人の子の父親でもあった。しかし、永井隆博士は原爆の放射線による病気（白血病）の研究をしながら「長崎の鐘」や「この子を残して」などの本を17冊も書いた。寝たきりとなっても戦争や原爆の恐ろしさ、命と平和の大切さを訴え続けた。

僕が一番心に残っているのは、永井隆博士がこの「如己堂」につけた意味「己の如く隣人を愛せよ。」だ。永井隆博士が救護活動や病気の研究を熱心にやったのはこの思想があったからだと思う。この考えは現代社会にも通じて「人を愛す心」が戦争や核兵器を無くす第一歩に繋がると思う。また、永井隆博士の言葉も心に残った。その言葉は「どん底に大地あり」だ。この言葉は、どん底の状況からこそ幸福は生み出され、育て上げられていくのだという想いから発せられたものである。実際、被爆後に長崎の人々は、新芽を出した神社のクスノキの大木に希望を見出し、爆風に耐えた一本柱の鳥居に勇気もらい、復興に尽力した。これらの考えから長崎の方々の復興には、人を愛し、協力し、どん底でも立ち上がる博士や長崎市民の方々の素晴らしさを感じた。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣研修に参加して本当に良かったと思った。他の学校の人たちの意見交換などの交流や原爆の恐ろしさ、平和の大切さを感じ、戦争を2度と繰り返してはいけないと心の底から思う貴重な経験が出来た4日間だった。

77年前に原子爆弾が落とされ、多くの命が奪われた。また、今でも原爆による後遺症に苦しめられている被爆者の方々も多くいる。被爆者の方々は被爆体験講話を開くなどをして、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを伝えている。しかし、被爆者の方々の平均年齢は84歳を超え、また、年が経つごとに核兵器の恐ろしさを知らない人たちが増えてしまうのではないかと不安になる。

必要なことは、実際に長崎に行き、原爆の恐ろしさを目で見て耳で聴いてきた私自身が、できるだけ多くの人々に「伝える」事だと思う。そうすれば戦争や原爆、核兵器の恐ろしさ、それらがもたらす残酷な結果を知ってもらい、一人ひとりが平和を大切にすることが強まると思う。これからもっと多くの人々が平和の大切さを感じられる世の中になってほしい。平和とは「人が人を思いやり、核兵器も戦争もない、皆が笑って暮らせること」だと学んだ。

# 長崎を最後の被爆地に



郡山市立片平中学校2年 佐藤 あおい

## 1 派遣研修への参加に当たって

研修前の私は、長崎原爆について詳しく知らなかった。今回の長崎派遣にあたって、戦争、原爆のことについて調べてみた。1945年8月6日に広島へ、9日には長崎へ原爆が落とされた。そして、大勢の人の命が奪われた。生き残ったとしても放射線などが原因の後遺症で苦しんでいる人が今もなおたくさんいることが分かった。今ではロシアからウクライナへの無差別な攻撃が続いている。そのような中でも、戦争について深く考える時間は月日が経つにつれて減っていると感じる。そこで、今の若い世代に戦争の悲惨さを知ってほしい、二度と起こしてはいけないものだと考えてほしいと思った。また、交流を通して多くの学校のことを知り、仲を深めたいと思い、研修への参加を決意した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 長崎原爆資料館

原爆資料館では、ビデオルームでの長崎原爆をアニメで再現した「8月9日長崎」が特に印象に残っている。熱風、熱線、放射線の被害を受けて誰が誰だか分からなくなって亡くなっていく姿が描かれていた。助かった人々は、家族を探し、町中に散らばっている骨を形見として持っていた。遺体の場所が分からないのでいろいろな所に十字架を立てたという。「水をください」「殺してください」。この言葉を聴いてとても胸が苦しくなった。私は約10分間のアニメでたくさんの感情を味わった。また、原爆投下時の写真が多く展示されていた。爆心地付近のほか、すべてが「この世の終わり」を感じさせた。実際に投下された4.5トンもの原爆、「ファットマン」の模型を見た。形のあるもの

すべてを壊すと同時に、何万人もの命を奪ったものだ。見た目からは予想もできない恐ろしいものだと分かった。

### (2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、被爆者の方からのとても貴重な講話があった。「当時は12歳だった。1時間目が終わると3分間の警戒警報が鳴った。じきに空襲警報が鳴り、山へ逃げ、伏せた。500m上空で爆発し、熱さを我慢した。身に着けていたTシャツなどは燃え、マッチや油などへ広がり大きな火事になっていった。炎天下の中、手の皮膚が剥がれお化けのようになりながら水を求め川へ向かう人々が大勢いた。川近くや水中で亡くなり大量の遺体が広がっていた。」この話を聴き、自分が想像する以上の事態だと身にしみた。「命をつないでいけて本当に良いことばかりです。」と話された言葉から被爆者の方の必死さを感じた。また、体験講話から、命の大切さを理解できた。

### (3) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

平和祈念式典では、会場での式典に参列した。一生になかなかない体験ですごく緊張した。会場にはたくさんの方がいて、外国の方も多く見かけた。はじめの被爆者合唱ではとても鳥肌が立った。歌詞や歌声からは被爆者の方々の強い想いを感じた。午前11時2分、原爆が投下された時刻に合わせ1分間の黙とうを行った。一瞬にして奪われた命は二度と戻ってこない。それでも、核兵器や戦争はなくなる。だから、私が戦争の悲惨さ、命の尊さを伝えていこうと手を合わせ誓った。平和への誓いでは被爆者の方の核兵器禁止条約への必死な願いが伝わった。私が今できることは少ないが、核兵器をなくすための行動を積極的に行いたいと思った。



< 今の私達にできること >

### 3 心に残ったこと

私が長崎への研修で心に残ったのは青少年ピースフォーラムだ。中でも、戦争の疑似体験、班ごとの平和学習が特に印象に残っている。疑似体験では、カードに大切なもの、人、場所を書き、場面ごとに失うものを捨てていくという体験だった。戦争が終わると、私の手元にはカードはなかった。「何も残らない」。当時の人々はそれを体験した。その事実がとても寂しく感じた。当たり前をずっと大切にしたいと思った。そして、空襲から身を守る方法を教わった。鼓膜が破けないように親指で耳を塞ぎ、目が飛び出ないように指で押さえ、口を開けて地面に伏せる。今ではありえないことで、少し怖くなった。平和学習では、様々な県から集まった仲間とグループごとに争いが起こる理由を出し、それに対する解決策を考えた。年齢もバラバラなので人によって違う考え方で面白かった。最後に今自分にできることを色紙に書いた。それをコルクボードに貼って折った鶴を飾り付けて、協力して作ることができた。班のみんなと仲良くなれてとても楽しい思い出になった。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣研修では、戦争の悲惨さ、平和の尊さ、核兵器の恐ろしさを見て聴いて感じられた。また、長崎の文化や歴史も知ることができた。人々が水を求めて亡くなったことから平和祈念館に水を使った水盤があるのを知った。設置している場所にも意味があり、とても驚いた。「平和の原点は人間（ひと）の痛みがわかる心をもつことです」。これは被爆者が残した言葉だ。平和をつくるのはとても難しいけれど、少しずつの思いやりで争いがなくなっていったらいいなと思った。戦争で亡くなった大勢の人々や被爆者のために、私達が今後の未来を創っていくうえで、戦争という過ちをもう二度と繰り返さないために日本だけでなく世界中へ伝えていくべきだと思った。研修を通して当たり前の日常があることに感謝して毎日を過ごしていこうと思った。そして、素敵な仲間と4日間を楽しく過ごし、充実したとても良い派遣研修になった。

# 核兵器をなくすため



郡山市立喜久田中学校2年 古川 龍 星

## 1 派遣研修への参加に当たって

昔長崎には、原子爆弾がおとされた。戦争についてあまり知らなかった僕は、そのことしか分からなかった。これまで、「戦争」という言葉は恐怖や悲しみのようなものがたくさん詰まっていると思い、目を背けてきた。しかし、この長崎派遣事業をとというものがあること知り、戦争について深く学ぶチャンスなのではないかと思った。長崎で戦争と平和について学び、長崎で学んだことを周りの人達に伝えたいと思い、長崎派遣事業に参加することを決意した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 原爆資料館

1945年8月9日11時2分、長崎に原子爆弾が落とされた。この瞬間に被害を受けたものが長崎資料館にはたくさん展示されている。原子爆弾の爆風で11時2分のまま止まってしまった時計。熱線で溶けてしまった瓶や硬貨。放射線で人体に異常が出ている人間の写真。見ただけでも胸が締め付けられるような資料ばかりだった。その中に、長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」のレプリカがあった。長さ3.2512m、直径1.524mしかなかった。こんなに小さなものなのに何万人もの命を奪うことができる。そのような事実と人間の技術に改めて恐怖を覚えた。この原子爆弾がなければ長崎はもっと栄えていたのかもしれないと思うと更に胸が締め付けられるような感じがした。

### (2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、2日間にわたり戦争の残酷さや悲惨さ、平和の尊さについて考えたり学んだりした。

1日目には、実際に被爆した方から戦争当時

の話を聴かせていただいた。今の日本では考えられないようなことばかりだった。感情が込められていて、つらくて大変だったことが伝わってきた。その後、フィールドに移り、原爆に関する場所を見た。平和への願いが込められている様々な像があった。「未来を生きる子ら」という銅像が一番心に残った。実際の女の子がモデルで、浮かばれない子供たちのために建てられたらしいからだ。

2日目には、グループに分かれてなぜ争いは起きるのかについて考えた。僕達のグループではケンカに焦点を当てて考えた。人の気持ちを考えないためケンカが起きるといった意見が多かった。お互いのことを尊重しあうことが大事という考えからだ。お互い違う人間で、違う思考を持っていることを理解して話すことが大事だと分かった。

### (3) 平和祈念式典

僕は平和祈念式典に参列することが出来なかったが、別の会場で見ることが出来た。別の会場にいても緊張感を感じた。一番印象に残ったのは、長崎市長の平和宣言だ。核兵器に対して「持っているでも使われないだろうというのは幻想。核兵器をなくすことが、未来を守るための唯一の現実的な道だ」と核兵器廃絶に向けて語っていた。原子爆弾が落とされたということはそれだけ大変なことだと再度実感した。長崎では、多くの人が「長崎を最後の被爆地へ」との思いで活動している。こんなに悲惨な思いを繰り返さないために、この思いを広めていけたらいいと思う。



<花 瓶>

### 3 心に残ったこと

一番心に残ったのは、写真にある花瓶である。これは有名なものではない。一般の家庭で日常的に花を飾っていたものだろう。原子爆弾によりその日常が奪われた。そのことをこの花瓶は教えてくれる。人の命を奪い、思い出のものも何もかも奪う核兵器と戦争は人間の技術の無駄づかいだと思った。人間の高度な技術は、生活を豊かに、世界を平和にするためのものだと思っている。その技術を暴力に変えてしまったことでこのような悲しい出来事が2回も起こってしまったことに恐怖を感じている。この花瓶のように無惨な姿になってしまったものは沢山ある。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

研修に参加して、毎日の平凡な暮らしが当たりまえではないことが分かった。今もなおつづいているウクライナ侵攻。北朝鮮からのミサイル。核兵器がいつ使われてもおかしくないと思う。暴力では物事は解決しないということを学んだ。核兵器は必要ないということを僕たちが発信すべきだと思う。少しでもこの輪を広げて平和を未来へとつなぐことが大事だ。まずは、僕が身近な人に広めようと思う。

# 知ることの大切さ



郡山市立守山中学校2年 栗原歩花

## 1 派遣研修への参加に当たって

私が小学生のとき、「表紙が気に入ったから」という理由で手に取った本があった。そこには、戦争で亡くなった方のご遺族の話が書いてあった。戦争に対して「残酷だ」としか思っていなかったが、たくさんの方が苦しんで、今もつらい思いをしていることを知り、心を動かされた。だが、当時の私には難しそうな問題でもあったため、自分から調べることはしていなかった。だから、原子爆弾がどんな被害を与えたのかも、今が本当に平和なのか、自分には何ができるのかも、ほとんど知らなかった。

この派遣研修の話を知ったとき、戦争と平和について深く知るチャンスだと思った。今までほんの少ししか知らなかったことや全く知らなかったことを学び、自分に何ができるのかを考えられるようにするために、長崎への派遣研修の参加を希望した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 被爆体験講話

青少年ピースフォーラムの1日目の最初に、被爆体験講話があった。戦争当時12歳の少年だった山田一美さんという方の講話を聞いた。ご自身の体験や、被爆後の町や人の様子が描かれた絵の説明などから、今まで曖昧だった原子爆弾による被害の実態が、自分で目にしたかのように伝わってきた。その中で特に印象に残ったことがある。それは、町のほうから逃げてきた人たちの様子だ。皮膚は裂け、目はうつろで、口は苦しそうに半開きで、ほとんど意識なく歩いているようだったそうだ。助けを求めて叫んだり走ったりすることなどできなかったのだろう。普通では考えられない程の大やけどを負っ

ていたのだ。罪のない人を、生きているのかも分からないような、そんな姿にしてしまう原子爆弾を、二度と使ってはならないと強く思った。

### (2) 原爆死没者追悼平和祈念館

ピースフォーラムの中で、「ごんまりワールドワーク」という活動にも参加した。班ごとに様々な場所を見学した。その1つに、「原爆死没者追悼平和祈念館」という施設があり、とても印象に残っている。私たちの班では、運よく、被爆されたある方の手記の朗読を聴くことができた。その方は、原爆が投下されてから数日後、ぼろぼろになった遺体を見かけたが、「これは妹じゃない」と素通りしたそうだ。しかし、被爆から何十年も経ったある日、ふと、「あれは妹だったのではないか」と思ったそうだ。「誰かがちゃんと埋めてくれたらどうかと、今でも後悔している」という言葉に、強く心を打たれた。たった1発の原子爆弾が、77年経った今でも、たくさんの方の心と身体に傷を残していることを、絶対に忘れてはいけないと思った。

### (3) 平和祈念式典

私は出島メッセ長崎会場で平和祈念式典に参列した。式辞や長崎平和宣言を通して、様々な方のお話を聴きました。今年はその誰もが、「今、核爆弾がいつ落とされるかわからない状況だ」と繰り返していた。ウクライナやロシアで、命を落とす人、家族を奪われる人、攻撃をして、他人の命を脅かしている人がいると思うと、心が痛かった。

11時2分からの黙とうの間、この研修で知った原子爆弾の恐ろしさを思い出していた。そして、世界から戦争と核兵器が無くなることを祈った。長崎を最後の被爆地にするために、自分にできることを探し、実行していこうと決意した。

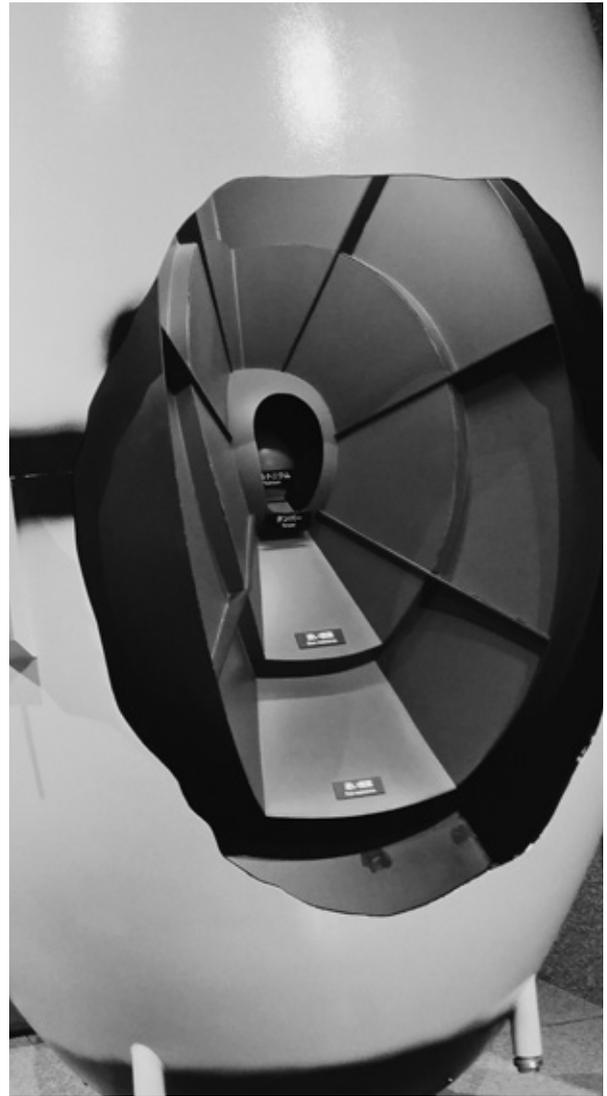
### 3 心に残ったこと

今回の研修の中で最も心に残ったのは、原爆資料館だ。模型、年表、写真、被爆した日用品、当時の様子が描かれた絵などのたくさんの展示物を見て、私は何度も驚いた。

右の写真は、実物大のファットマンの模型の一部だ。中の構造が見えるようになっていた。放射能を出すプルトニウムは、片手で持てるくらいの大きさしかないが、その周りに、火薬などが何層も重ねられていた。表面の黒い模様は、気密性を高めるためのプラスチック塗装だそう。ファットマンを上空 500m で爆発させたのは、威力が最大になり、被害が広い範囲に及ぶからだ、とガイドの方に教えていただいた。私はこのとき、人の命を奪い、苦しめるために「工夫」をしていた人がいたことに、とても悲しい気持ちになった。近くにあった「原爆投下までの経過」という年表に、人の名前が何回も出てきた。たくさんの人を犠牲にする原子爆弾を、たくさんの人が関わって作る。しかも、世界には、まだ 12,720 発もの核兵器がある。力ではなく、話し合いで保たれる平和は、完全に実現されているわけではないことを知った。この事実、悲しみが溢れ、怒りが湧いてきた。自分たちの国が平和になるためだとしても、核兵器に頼るのは、絶対にいけないと思った。核兵器廃絶を訴えることの重要さを初めて心の底から強く感じた。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、長崎派遣事業に参加する数か月前まで知らなかったことを、たくさん学んでくることができた。特に、世界に 12,720 発もの核兵器があることを知ったときに、強い衝撃を受けた。それは、何も知らない私が、世界が現実より何倍も平和だと思い込んでいたからだ。私の身近なところにも、かつての私のような考えの人がいると思う。私が驚いたことを伝えれば、考え方が変わるかもしれない。今回、原爆が考えられないほどの被害を与えたこと、今も身体と心に傷が残っている方がおられることなど、たくさんを現地で学んできた。それを身近な人に伝えていくのが、私ができることだと思った。それまで知らなかったからこそ、同世代の



< 人を苦しめるための「工夫」 >

人に訴えられることもあると信じて、平和の輪を少しずつ広げていきたい。

この4日間、核兵器の開発に関わる人たちの多さを知ったが、それ以上に、平和に向かって動いている人たちがいることも知った。相手の意見を受け入れ、いろいろな人がいることを知り、考え方が違うことを受け入れることが、争いをなくすための第1歩だと思う。核兵器廃絶と平和を願うだけでなく、自分から平和に向かって動き出せる人になっていきたい。

# 長崎が最後の被爆地であるために



郡山市立郡山第一中学校2年 大内彩加

## 1 派遣研修への参加に当たって

私は、8月6日に広島に、8月9日に長崎に、原子爆弾が投下されたことを知っていたが、戦争は怖いものだという認識があり、戦争について調べたことがなかった。そのため、街や人にどのくらい影響が及んだのかは知らなかった。だが、現在も続いているロシア連邦によるウクライナへの軍事侵攻の影響もあり、平和や戦争について考えることが必要だと思っていた。そんな時、先生から長崎派遣事業のお話があり、平和や戦争について正しく知って、考える良い機会となればと思い、参加を希望した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館に展示されている写真や生活用品などの資料。それらは、原爆が投下されるまで、人々が生活していたことを示すものだ。実際に、文字盤が曲がり、針が原爆炸裂時刻一午前11時2分を示して止まっている柱時計や、中に入ったご飯がその後の火災によって炭化してしまったお弁当箱などが展示されている中、一番心に残っているのは、熱線によって沸騰し、泡立った瓦、人なのか分からないほど黒焦げになった少年の写真だ。これらは、想像していたよりも残酷なもので、胸が痛くなった。瓦が泡立ったり、体が黒焦げになってしまうことなど、ありえるのかと、疑ってしまうと同時に、一発の原子爆弾が落とされたことによって、一瞬で街並みが変わり、一瞬で人やものに被害が及んでしまう原子爆弾の威力と恐ろしさを感じた。そして、「二度とこのようなことが起こってほしくない」と、心の底から思った。

### (2) 青少年ピースフォーラム

1日目は、被爆者である山田一美さんの被爆体験講話があった。私は、講話で山田さんが仰っていた「国民の命を大切にする時代に」という言葉に共感した。何の罪もない人々の命が奪われることは起きてほしくないと思うのと同じ時に、今、平和に過ごしていけることへのありがたみを感じた。

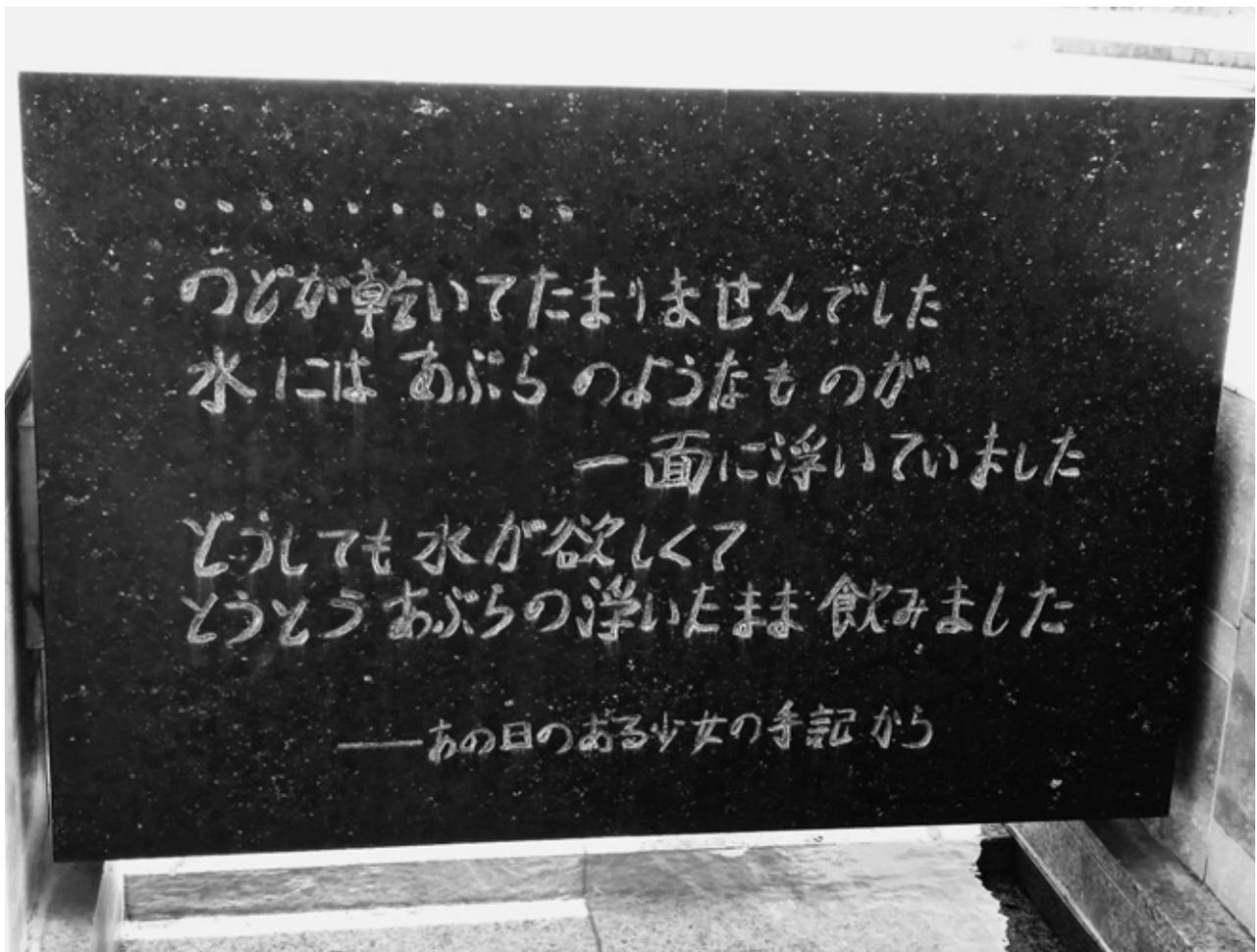
被爆者平均年齢が84歳となり、被爆された方が年々減ってきている中、戦争を実際に経験されたからお話を聴くことができ、とても貴重な体験ができた。

2日目は、全国各地から集まった幅広い世代の方々と「喧嘩・戦争が起こる理由」や「喧嘩・戦争をなくすには」といったことについて、グループになって意見交換をした。話し合いでは、自分だけでは出せない考えも出て、自分を高めることができた。

### (3) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

私は、中継会場である出島メッセ長崎から平和祈念式典に参列した。平和祈念式典に参列していて1番印象に残ったのは、被爆者合唱だ。メンバーの高齢化で、今年で最後だという被爆者合唱には、被爆者の方々の「二度と戦争を起こしてはいけない」という気持ちが、強く込められているのを感じ、涙が出た。

以前、テレビで式典の様子を見たことがある。その時は何となく見ていたものが、今回は違って見えた。実際に被爆地を訪れ、自分の目で原爆の被害を見て、自分の耳で被爆者の方の話を聴くことができたからだろう。



< 一人の少女の声 >

### 3 心に残ったこと

石碑に刻まれたこの言葉は、9歳の時に被爆した山口幸子さんの手記に書かれていたものだ。当時、原子爆弾が落とされ、熱線と爆風によって体が焼けただけ、水を求めながら亡くなる方が大勢いた。水を求めるあまり、水に顔を突っ込んだまま亡くなっている方もいたそうだ。そんな地獄のような景色の中、9歳の少女が、「油の浮いた水」という、飲める状態ではない水を飲んだということに衝撃を受けた。油が浮いている水を飲むことなど危険で、普通ならためらうことだと思うが、当時はそんなことを考えている余裕がないほど、水を求めているという事実が心で痛くなった。もしも、私が同じような状況に置かれたら、どうするのだろうか。体中をやけどした状態で水を飲むと死んでしまうと分かっているけど、飲んでしまうのか。それとも、飲みたくても、油の浮いた水だからと飲むのを我慢するのか。いくら考えても、結論は出ない。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

戦争は、誰も幸せにならない。今回の長崎派遣事業を通して、教科書では学ぶことのできない命の尊さや戦争の悲惨さを学ぶことができ、とても貴重な経験ができた。

最初に長崎の街並みを見たとき、この綺麗な街に恐ろしい原爆が落とされたのか？と、信じられなかった。原子爆弾が日本に2度も落とされたことを、決して忘れてはいけない。多くの人々の命、生活が一瞬で奪われたのだ。戦争を二度と繰り返さないためにも、平和の大切さと、戦争の悲惨さなど、私たちが長崎で学んだことを伝えていかなければならない。長崎が、最後の被爆地であり続けるためにも。

# 繋いでいく平和



郡山市立郡山第二中学校2年 古河未羽

## 1 派遣研修への参加に当たって

答えたくない体験。私の母が小学生の頃、母の祖父に戦争の話聞いてくるという宿題があり、「戦争ってどんな感じだったの?」という質問に、「あまり話したくない。」と言ったそうだ。その時、私の曾祖父の頭の中には、私たちが想像もできないような戦争の恐ろしい映像が広がっており、きっと思い出したくなかったのだろう。戦争体験者は、これからの未来を歩む私たちのために、悲惨な戦争の話や平和の尊さを語ってくれるのだと思った。だからこそ私もこの想いを語り継ぎ、未来に繋げたいと強く思うようになった。

原爆が落とされた長崎へ行き、自分が学んだことや感じたこと、そして被爆者の方々の想いをたくさんの方々に知ってもらおうと強く決心した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムで戦争の模擬体験というものがあった。そこで最初に「大切なものカード」というものを書いた。それは自分の大切な「人」「もの」「場所」を小さいカードに書くというものだ。私のカードは全部で15枚になった。その後戦争の模擬体験が始まる。「戦争が始まりました。」とアナウンスされ、電気が使えなくなり、カードに「スマホ」など電気製品を書いた人はそのカードが回収された。次に男性は戦いに行くようになった。そして私の「父」と書いたカードが消えた。私は生きて帰って来られるかわかならぬ父を見送る姿を想像しただけで涙が出そうだった。その後も戦争が続く、学校などの公共の場が使えなくなり、「学校」

や「友達」「友達と笑い合う時間」など沢山のカードを手放さなければいけなくなった。手持ちのカードはほとんど奪われた。いよいよ原爆投下のときを迎えてしまった。「ピカッ、ドン」と一瞬にして沢山の人の命を奪う原爆だ。私の手元にはどんなカードが残っているだろうか…。最初に15枚もあったカードは1枚も残らなかった。戦争で何かが起こるたびにカードが取られ、最後には「自分」と書いたカードさえも消えていた。大切なものが奪われていくのが目に見えることは本当に恐ろしかった。戦争の何がいいのか。戦争で何が残るのか。どうして罪のない人たちの幸せをこんなにも沢山奪っていくのだろうか。

戦争というものは、自分の大切なものが全て奪われる悲惨なものだと改めて感じた。

### (2) 被爆者の体験

長崎では沢山の被爆者の方々の声を聞くことができた。式典、ピースフォーラム、そして平和案内役の方。平和祈念式典では、被爆者代表の宮田隆さんが平和への誓いを語ってくれた。当時5歳だった宮田さんは爆心地から2.4km離れた家で六畳間から玄関口まで吹き飛ばされ、母親の胸の中で目覚めたそうだ。「今もあの時の母親の胸の鼓動が耳に残っています。」とおっしゃっていた。77年も前のことだが宮田さんはその時のことを鮮明に覚えており、どれほど恐ろしいことだったのかが伝わってきた。被爆した方々の声は、一つひとつに想いが込められており私の心に強く響いた。宮田さんは最後に「核兵器のない世界実現への願い」を引き継いでいくことを誓った。

長崎の被爆者の方々は「長崎を最後の被爆地に」という想いから、私たちに自分の体験や平



< 被爆後の浦上天主堂 >

和の尊さを沢山伝えてくださった。私もこの想いを世界に届けたいと強く感じた。

### (3) 平和祈念式典

平和祈念式典には多くの学生が参列していた。私は若い世代が参列するのには大きな意味があるのだと思った。

黙祷。私の頭の中には77年前のあの映像が映った。77年前の今この瞬間が長崎を大きく変えた。私がある時にこの場所に立っていたら亡くなっていた。そう考えると胸が締め付けられるような感じがした。私は心の中で「私たちが平和をつないでいきます。」と誓った。

長崎平和宣言。最後に田上長崎市長は昨年引き続き放射能の被害を受けた福島と繋がって核兵器廃絶と世界平和の実現に力を尽くしていくことを宣言した。11年前の東日本大震災。福島県は津波の影響で原発事故が起こり放射能の被害を受けた。福島は今かつての長崎と同じように復興に向け歩んでいる。田上市長が福島と繋がっていくと宣言した時、強い繋がりが感じられ感動した。

## 3 心に残ったこと

私は原爆の威力が伝わってくる被爆後の浦上天主堂が心に残った。浦上天主堂は爆心地から約500mの所に位置し、建物が崩れ落ちて、元の形が分からないほどになっている。浦上天主堂は禁教令廃止後、浦上のキリスト教信者によって作り上げられた。天主堂は東洋一の聖堂を目指して19年の年月をかけて作られた。しかしその約31年後、原爆投下により一瞬にして建物が破壊され、そこにいた信者全員が亡く

なってしまった。私は、原爆資料館で浦上天主堂完成日の信者の集合写真を見た。信者の方々は出来上がった天主堂にみんな笑顔だった。「この写真にいる人はほぼ全員、亡くなってしまいました。」と平和案内役の方が教えてくださいました。原爆は一瞬にして全てを破壊し、その方々の命まで奪った。原爆とは世界一、人々に不幸をもたらす兵器だと改めて感じた。

## 4 派遣研修に参加して感じたこと

私の戦争への理解は不十分だった。なぜ平和が大切なのかよく知らなかったからだ。しかしその答えは長崎にあった。原爆がもたらした悲惨な状況を原爆資料館で目の当たりにし、被爆者の方々の想いを聞いた時、私は戦争を理解することができた。戦争は何も残らない。大切なものが全て失われる。大好きな家族、友達、学校など。全てが目の前から消えてしまう。核兵器の本当の恐ろしさを知らない。だからこそ、核兵器を作り続け保有する。

被爆者から私たちに、そして私たちは次の世代へと平和を語り継ぐことが私たちに任された重要な課題だ。私たちが長崎で起こった悲惨な出来事を伝え続けなければ、あの時のように当たり前の日常は一瞬にして消え去ってしまうだろう。さらにあれから77年も経った今、核兵器の威力というのは計り知れないものになっている。あの時以上にもっと悲惨で残酷なことが起こるだろう。「長崎を最後の被爆地に」という被爆者の想いと平和のバトンを繋いでいきたい。

# まずは相手によりそって



郡山市立郡山第三中学校2年 遠藤蒼大

## 1 派遣研修への参加に当たって

「戦争」について学ぶ機会があると聞いて、どこか遠い歴史を学ぶように感じる自分がいた。最も新しい戦争である第2次世界大戦が何年前なのかすらうろ覚えだった。しかしある日突然、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。戦争が始まったという実感が全くなかった。そして、自分ができることは過去の戦争を知ることだと思い、この派遣研修に参加しようと思った。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 原爆資料館

建物に入った瞬間、雰囲気ガラッと変わった。そこには悲惨な光景が広がっていた。黒く焦げたお弁当、11時2分で止まった時計、溶けて変形した瓶、壁に残った人の影、ボロボロの服、それぞれの展示品からたくさんの思い出が感じられて、見ていることが辛かった。

中でも、最初に観た映像は衝撃的だった。そこには、77年前の8月9日、原子爆弾が投下された瞬間からの映像が残されていた。たった1発の爆弾によって、人が人としての形を保てずに崩れていくシーン、目の前で多くの人々が次々と倒れていくシーン、一瞬で日常が失われる残酷さは、図表や数字のデータでは表しきれないことを知った。展示品を観たからこそ、たくさんの死者のうちのたった1名にさえ、数多くの悲しみが隠れていること、その1名にすら含まれなかった人もいるということに気づくことができた。そんな人たちへの想いで胸が痛くなり、戦争の理不尽さを思い知った。

### (2) 平和祈念式典

長崎市長による長崎平和宣言では、現在の世界の平和維持の危機が指摘された。市長の話を受けて、僕は被爆者の思いを受け止め、行動することこそが自分にできることだと感じた。僕は今まで、いつ核兵器が使われてもおかしくない世界情勢であるにもかかわらず、現代に核兵器が使われることはないだろう、という固定観念に囚われていたことにも気付かされた。ウクライナの情勢は緊張時に比べて比較的落ち着いてきたように感じるが、一步間違えば日本を含む世界の国々すべてを巻き込んで核戦争になっていたかもしれないと考えると、とても恐ろしく感じた。戦争を他人事として、目を向けていなかった自分はとても危険なことをしていたのかもしれないとも感じた。

日本は世界で唯一の被爆国であり、これ以上犠牲者を増やさないために、出来ることがたくさんある。その一つが、被爆者の方たちの凄惨な経験を伝え続けることだ。この式典で、決して戦争を繰り返してはならない、平和な世界を守り続けなければならない、という強い願いを受け止め、伝え、広めていかなければならない。

### (3) 永井隆記念館

永井隆博士とは、原子爆弾によって自身が重傷を負うも、信仰するキリストの教えに従って救護活動を行った人だ。永井博士の残した本には、彼の平和への願いが綴られていた。

「長崎がピリオッド!」「おろかな戦争を引き起こしたのは私達自身なのだ」

一つ目の言葉にはこれ以上被爆地を増やしてはならないという祈り、二つ目の言葉には戦争という道を選んだ日本への戒めが込められている。



＜ 平和祈念像 ＞

### 3 心に残ったこと

77年前、この平和祈念像の右手が指す上空に原子爆弾が投下された。この像には、原子爆弾の脅威、平和への望み、犠牲者への冥福などの祈りが込められている。この像は、平和のシンボルとして広く知られている。この像を見ると、原爆によって亡くなった方たちの悲しみが、胸に迫ってくる。1発の爆弾により、何もかも失った人々、長崎という町のことを考えさせられる。

今日も、この雄大な像が長崎、そして世界を見守っている。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

「戦争」、この言葉は教科書の中のことだと思っていた。しかし、本当は、もう危機は迫っていることだと知った。「戦争」、その言葉の重みが、ぐんと重くなった。たくさんの方が戦争をダメと言っている。それはキレイゴトなんかじゃなくて、大切なことなんだと、深く感じた。そしてその戦争は今、現在も起こっている。核兵器は無くなっていない。だから日本、世界中

全員が意識しておくべきなのだと思う。

日本は唯一の被爆国である。そのため、原爆による被害について学ぶことが多い。今も被爆の影響で苦しんでいる人がいるのだ。その方々を忘れてはいけない。そのことをよく理解できると思う。

しかし、日本だけが傷ついたわけじゃない。日本も多くを傷つけた。日本が多くの悲しみを作り出した。日本も戦争に参加した。日本が戦争を選んだ。日本が戦争を止めなかったのだ。その事実を忘れてはいけない。

永井隆博士の言葉にこういうものがある。「戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである！」

この言葉の通りで、何もかも無くなっていくのが戦争なんだと分かった。被害者も加害者もないということを知った。

争わないためには、常に相手の視点を持つことが大切だ。相手のことを知り、ゆるる。分かち合う。そして、愛する。これが平和への第一歩なのだ。

# 長崎を最後の被爆地に



郡山市立郡山第四中学校2年 龍崎結愛

## 1 派遣研修への参加に当たって

今回私が長崎派遣事業に参加しようと思ったのには理由がある。

「77年前の8月9日、長崎に原爆が投下された。」私はこのことは知っていたが、恐ろしい事実を目を向けていなかった。だが、今回実際に行ける貴重な機会をいただき、自分の目で8月9日に起きたことを知れるチャンスだと思った。派遣研修の4日間、原爆としっかり向き合いたい。そう思い、私は長崎派遣事業への参加を希望した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 長崎原爆資料館

資料館内には溶けた6本の瓶や11時2分で止まった柱時計などが展示されていた。

中でも私にとって印象が強かったのは被害にあった人たちの遺体などの写真だ。原爆が落とされ爆風や熱線の影響で遺体はどれも黒こげだった。それらの写真を見て私は心を痛めた。あまりにも衝撃的だった。周りには家などが崩れたのか瓦礫ばかりで被害の大きさを物語っていた。

遺体の中には人だけでなく馬もあった。爆心地付近を通行中に被爆したのだ。写真の下にはこんなことが書かれていた。「馬は進行方向と逆に倒れている」と。これを見て驚いた。爆風で遠くに飛ばされ、向きが変わったのだろう。私は原爆に対しての怒りと恐怖の気持ちがこみ上げてきた。

原爆はあってはならないものだ、そう感じた。

### (2) 青少年ピースフォーラム

1日目は被爆者の山田さんの話を聞いた。言葉一つひとつが胸に刺さった。被爆者の山田さんは当時12歳で被爆したのだ。山田さんは「戦争を起こしてはいけない。武力で解決するということはあってはいけない。」そう話した。この言葉を今すぐに世界中の人に伝えたい。そして本当の平和を作りたいと思った。

2日目は同年代の人たちと平和について考えた。けんかが起きるきっかけって？それらをなくすためにはどうする？などについて真剣に考えた。いろんな意見を出し合い、私は1番大事な「話し合い」だと思った。今までに起きた戦争、けんかもちゃんと話し合っていれば起こらずに済んだかもしれない。相手がどんな人であれ話し合うことは大事だ、と意見を出し合うなかで感じた。

「迷ったら話し合い」簡単な言葉だが案外難しいものなのかもしれない。私はこの言葉を守っていき、身の周りのささいなことから平和にしていきたい。

噴き上げる巨大なきのご雲。  
なにが起きたのか。  
人びとはどうなってしまったのか。  
雲の下の真実を、知ってください。  
——忘れないでください。  
——伝えてください。

< 心に強く残った言葉 >

### 3 心に残ったこと

この写真は長崎原爆資料館に飾ってあった言葉だ。たった6行のメッセージだが、そこからは様々な想いが感じられた。今回の研修で私はいくつもの真実を知ることができた。だが、「知る」だけで終わらず、「忘れない」そして「伝える」このことが大事なのだと言葉を読んではっとした。

長崎が被爆して70年以上も過ぎ、今の子どもたちは8月9日に原爆が落とされた。ということしか知らない人もいるだろう。研修前は私もそうだった。だからこそきちんと知ることがいかに大切なことか、実感した。これから何年も過ぎていく、そんな中で長崎や広島に起こったことはいつまでも忘れてはいけない。平和を守っていくために一人でも多くの人に私が学んできたことを伝える、これが、私が研修へ参加した使命だ。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの4日間で印象に残った言葉がいくつもある。一つひとつが胸に刺さり「平和」に関係している深い言葉だ。

「核と人類は共存できない。」「平和の原点は人間の痛みがわかる心を持つ事です。」青少年ピースフォーラムのワークシートに書いてあった二つのメッセージだ。核というものはこの世界に必要なのか。なぜつくられたのか。研修中に何度も心の中でそう思った。他の人の痛みがわからないから戦争などがおきるのだろう。相手の気持ちを考えて行動する。学校でよく耳にする言葉だ。子どものころのほうがよく平和について考えられているのかもしれない。大人が世界を平和にするという決まりはない。子どもだからこそ、子どもにしかできないこともあるのだ。

「長崎を最後の被爆地に」この言葉を読んで皆さんはどう思うだろうか。現在のウクライナとロシアの戦争について、何人もの方が、「あの日（1945年8月9日）起こった様なことが、二度と起こらないことを願っている」などと言っていた。もう世界中に被爆地をつくらないように「長崎を最後の被爆地に」という言葉を一人でも多くの人に知ってほしい。

二度と人びとが苦しむようなことが起きてほしくない。起きてはいけない。

この平和を守り続けるために。

# 平和への道



郡山市立郡山第五中学校2年 菅野陽太

## 1 派遣研修への参加に当たって

戦争は私にとって遠い存在だと思っていた。しかし2022年2月24日から始まったロシアによるウクライナ侵攻により戦争がとても身近な存在になった。これを機会に私は戦争について調べてみた。しかし調べれば調べるほど戦争の残酷さを知り調べるのをやめていた。この派遣事業の話聞いた時「戦争について、また学ぶチャンスだ」と思った。少し怖かったがこの派遣事業に参加してみようと思った。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 原爆資料館

原爆資料館には、戦争や、原爆に関する資料、写真が展示されていた。その中でも特に印象に残っているのは原爆の被害を受けて原爆症を発症してしまった少女の写真だ。顔半分が元の形がわからないほどただれていた写真を見たとき改めて原爆の恐ろしさを知ることが出来た。その他にも、原爆の熱線で溶けたビン、ガラスの破片が刺さった服、原爆ファットマンの模型などを見た。原爆資料館を出た際にはこれまでに体験したことがないほどの悲しい気持ちになった。

### (2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラム1日目は、まず当時12歳で被爆した山田一美さんの講話や、ピースボランティアの方から被爆者の方についての話を聞いた。特に驚いたのが爆心地から半径500メートルの範囲にいた人が約10日以内に全員亡くなってしまったことだ。講話を聴いた後は戦時下の暮らしの疑似体験をした。自分の大切なものがどんどん奪われていく感覚は疑似体験ながらも、とても怖かった。その後は、こ

づんまりフィールドワークで国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館や、原爆殉難教え子と教師の像などを見学した。国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の館内ではどこでも水の音が聞こえた。それは原爆の被害にあった人々が水を求めてさまよったからだという話を聞き、私は水の音が当時の人の辛さを表しているように感じた。最後に、長崎市・平和のキャンドルの絵付けをした。自分の平和への想いを書いた。

2日目は、主に他県の人との意見交換だった。最初にうそつき自己紹介というものでゲーム形式の自己紹介をすることで緊張をほぐした。次に「ケンカ・戦争はなぜ起こる」「ケンカ・戦争をなくすためにはどうしたらいいか」などの議題について意見交換をした。自分と同世代の人との会話を通して自分の戦争についての考えが深まった。意見交換の最後には、My 平和宣言というものを書きこれからの平和活動の目標をきめた。

### (3) 平和祈念式典

昭和20年8月9日午前11時2分長崎県に原爆が投下され一瞬にしてすべてが奪われた。毎年この日に行われている平和祈念式典では、献花、献水、市長による平和宣言などが行われている。毎年家のテレビの前での視聴だったが、今年は、現地で見ることが出来た。私は、実際に平和公園に行くことはできなかったが、別会場の出島メッセ長崎でオンライン視聴をした。式典が始まる前には、ハンドベルの演奏を聴いたり被爆者の体験を書いた本の朗読を聞いたりした。式典が始まり午前11時2分死者に黙とうを捧げた。平和祈念式典を通して亡くなった方の想いが通じたような気がした。



< 被爆したカラスザンショウ >

### 3 心に残ったこと

上の写真は、旧城山国民学校敷地内にあった被爆樹木で2016年7月に枯死が確認されたカラスザンショウである。このカラスザンショウは、被爆しながらも70年以上生き残っていた。その姿に私は、強く感動した。その姿は原爆の被害を受けたのにも関わらず今日まで復興を続けてきた長崎の人々の姿と重なっていると思った。この木の他に長崎には、被爆しながらも今も生き続けている被爆樹木が30本もある。これらの木々からは、どんな時代や環境になっても絶対にあきらめないという強い思いを感じた。私は改めてあきらめないことの大切さを学ぶことができた。

長崎を出る前に覚えて帰ってほしいと言われた言葉が3つある「核と人類は共存できない」「平和の原点は人の痛みが分かる心を持つことです」「長崎を最後の被爆地に」この3つの言葉からは、もう二度と原爆の被害を生まないでほしいという願いと平和の心を持つ大切さが伝わってくる。この言葉を大切にこれからも生活していこうと心に誓った。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の派遣事業を通して改めて戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさがわかった。そして悲しみしか生まない戦争は二度と起こしてはいけないと思った。また平和への考え方も変わった。私は今まで平和とは国同士での戦いや争いのないことだと思っていたが今は違う。毎日おいしいご飯を食べること。学校に行けること。友達と話すことができること。身近な生活そのものが本当の平和なのだと思う。

また4日間違う中学校の友達と過ごすことで、コミュニケーションの大切さを学ぶことが出来た。初日は、あまり仲は良くなかったが、ともに活動をする中で親しくなることが出来た。この派遣事業を通してできた絆をこれからも大切にしていきたい。

被爆者の平均年齢が80歳を超えている今、実際に会って話を伺えた事はとても貴重な経験だった。これからは、戦争の悲惨さから目を背けないようにしたい。

誰も悲しい涙を流さないような時代が続くことを心から願っている。そのために、今回の経験を自分だけのものにせず、学校の友達などの若い世代の人たちに伝えていきたい。

# ゲンバク



郡山市立郡山第七中学校2年 遠藤喜人

## 1 派遣研修への参加に当たって

研修前の私は、長崎についてカステラが有名なこと、出島があること、また、昭和20年8月9日に原爆が落とされたことしか知らず、原爆の威力、原爆によってうけた被害などはあまり知らなかった。

夏休み前、長崎派遣事業のことを先生方から伺ったとき、私ははじめ、参加するか迷っていた。

しかし、家族や、先生方からの勧めがあり、実際に長崎に行き、原爆によってどれぐらいの被害をうけたのかを感じてみたいという気持ちが芽生え、今回の長崎派遣事業に参加を決めた。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館の中には11時2分で止まっている時計、黒く焦げた女子中学生の弁当、溶けた瓶など、当時の被害の大きさや様子を現すものがたくさん展示されていた。1番目に留まったのは、原爆の熱による火傷やケロイドによって皮膚の爛れた男性の写真や、「焼き場に立つ少年」である。それは凝視するには耐えがたく、思わず目を背けてしまった。

さらに、原爆資料館には、「ファットマン」と呼ばれた核兵器の模型があった。これは3m弱ほどで、こんな小さな物体が一瞬にして町を奪ったのかと驚いた。同時に、「ファットマン」や「リトルボーイ」と核兵器に名前を付け、区別していることは、許しがたいことであった。多くの人の命を奪った核兵器を許せない気持ちがこのときより強まり、もう2度と戦争は起こしてはいけないものだと思っただけでなく、強く思った。

### (2) 青少年ピースフォーラム

私たちは8月8日と9日に青少年ピースフォーラムに参加した。

1日目は、戦争の疑似体験をした。大切な人やもの、場所を、渡された12枚の紙に書き、戦争が進むにつれそれらが存在しなくなったら、箱に入れていくということだった。私ははじめ、6枚は残ると思っていた。体験が終わると、手に持っていた紙は1枚であった。周りを見渡してみると、0枚や1枚の人がほとんどであった。私は今までにない気持ちがこみ上げてきて戸惑った。それは驚きと悲しみとが混ざり合っていたと思う。もしも戦争が起きてしまったら大切なものや人が、存在しなくなってしまうと思うと恐怖も感じた。私はこのとき、今ある当たり前前にただ感謝していた。

2日目は、戦争について多くの人たちと意見交換をした。なぜ戦争が起こってしまったのか、自分にできることは何なのかなど、自分とは違った思いを持った人と話し合うことは、とても勉強になった。また、活動が終了したとき、「千羽鶴」という曲が動画とともにスクリーンに映し出された。平和への尊さや、ヒバクシャへの想いを歌ったもので、より平和への想いが高まった。

### (3) 平和祈念式典

私は出島メッセ長崎で、平和祈念式典を見ていた。平和祈念式典は、被爆者歌う会「ひまわり」の皆さんの合唱から始まった。「もう二度と作らないで被爆者を」というフレーズは、強く心に残り被爆された方々の強い想いを感じた。

そして、被爆者代表宮田隆さんの平和への誓いは、被爆当時の状況の話もあったためか、よりその想いを感ずるものであった。「核兵器の



< 川に流れる大量の遺体 >

ない平和な世界を実現させるため」という言葉を聴いて私は、戦争のない世界を、平和な世界を実現させるため、長崎派遣事業で学んだことを、伝えていきたいと思った。

### 3 心に残ったこと

上の写真は、たくさんの遺体が川に流されている絵である。私はこの絵が1番心に残っている。残っているというよりは、残ってしまったというほうが正しいかもしれない。私はこの絵を一生忘れることはないと思う。多くの人が水を求めて川に飛び込んだことは聞いていたが、その多くの人が亡くなってしまったと思うと、心がとても苦しくなった。いくら川とはいえ、川も熱かったと思う。やっとの思いで飛び込んだのに、川の水も蒸発し、なくなり苦しみながらお亡くなりになったのだろうと、考えてしまう。

今はどうであろうか、私たちは当たり前水道から水が出てきて、暑いと感じればプールなどを訪れ、涼むことができる。私は、これらができることは、とても幸せで、素晴らしいことなのではないかと思う。考えたくもないが実際に原爆が落とされてしまったらと想像す

ると、本当に現代は幸せであることがわかって思う。私はこのことを一生想っていたい。そしてこのこともまた、多くの人に、伝えていきたいと思った。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

私は長崎での4日間はとても貴重な経験になったと思う。新たな友人ができたのはもちろん、はじめは詳しくわからなかった原爆について、詳しく知ることができたからだ。原爆は多くの尊い命を一瞬にして奪ったこと、被爆した方々の体と心に多くの傷を負わせたこと、何よりも戦争は恐ろしいものだということなどを知ることができた。私はこの長崎派遣事業で初めて人の痛みを感じ涙を流した。

戦争はどれだけ悲惨なものか、どれほどの人を悲しませたのか、恐怖を植え付けたのかを実感することができた。もう二度と戦争という「過ち」を起こさないように、もう二度と被爆者を生み出さないために、被爆地を増やさないために、小さな一歩でも、今回の研修で学んだことや、想いを受け継いでいきたいと思う。

# 命の尊さと、平和の尊さ



郡山市立緑ヶ丘中学校2年 平河内 瑠 奈

## 1 派遣研修への参加に当たって

1945年（昭和20年）8月9日、長崎市に1発の原子爆弾が投下された。

私は、身近に戦争を経験している人や実際に戦争を経験している人に話を聞いたことがなく、テレビの情報や社会の授業でしか触れたことがなかったので、同じ日本でどんなことが起きていたのかを詳しく知るべきだと思った。

また、母が長崎に行った経験があり、現地の人や被爆体験者の話を聞き、「核兵器廃絶の大切さや戦争は絶対にしてはいけないという国民の思いをより身近に感じることができた。」という話を聞き、私自身も自分の目で見て、自分の耳で聞き、学びたいと感じた。

さらに、被爆地での研修を通し、学んだ成果を学校の人や郡山市民の方々に伝え、より多くの人に、たくさんの情報を知って欲しいと思い、この「長崎派遣事業」に参加した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 原爆資料館

原爆資料館には、重さ約4.5t（象と同じ重さ）の長崎型原子爆弾「ファットマン」や、被爆した長崎の街が再現されている「長崎地形模型」があった。また、爆心地から約1.2kmの三菱長崎製鉄所で被爆した、熱線の直射を受けた部分が焼け焦がれている作業員の作業服や、戦闘帽まであった。その他にも、中が丸焦げになった女子中学生の弁当箱、頭がい骨の付着した鉄かぶと、溶けた6本の瓶などもあった。

また、原子爆弾の映像をアニメ化させたものが上映されていた。そこで一番印象に残っているのが、原子爆弾投下後の人と街の様子である。街には被爆によって亡くなった、数え切れない

ほどのたくさんの遺体があった。原子爆弾投下後の夜、闇の中で呻き声が遠吠えのように響いていたという。あるお母さんは、息子の面影一つもない変わり果てた姿を見て、この人は本当に自分の息子なのかと泣いていた。そのお母さんは闇の中を必死になって探していたという。

私は、この約15分間の映像で「核兵器廃絶」がどれだけ必要とされているか、今の平和がどれだけ尊いかがよく分かった。そして今こうやって豊かに暮らせていることがどれだけ平和で幸せなことかを改めて学ぶことができた。私達は毎日の食事、そして毎朝何の心配もなく学校に行けること、家族や友達と笑顔で挨拶を交わしていることを当たり前と思わず、毎日の平和な生活に感謝してこれから生活すべきだと思った。

### (2) 平和公園

長崎平和公園には、高さ9.7m、重さ約30t、台座の高さ3.9mの「平和祈念像」が建っていた。「平和祈念像」にはいくつかの意味がある。まず、天を指した右手は“原子爆弾の脅威”を、水平に伸ばしている左手は“平和”を、横にした右足は“原子爆弾投下後の長崎市の静けさ”を、立てた左足は“救った命”を表し、軽く閉じた目は“戦争犠牲者の冥福”を意味している。このように、この「平和祈念像」には製作者の深い思いや戦争で被害にあった方々の深い思いが込められているのだと感じた。

今もまだ世界では、戦争が続いているところもある。ウクライナではたくさんの犠牲者がでている。早くこの世界から戦争をなくさなくてはならない。平和は一人では創れない。

私達がこれからの未来を創っていかねければいけないと思った。



< 11時02分を指して止まっている時計 >

### 3 心に残ったこと

上の写真は、午前 11 時 02 分を指して止まっている時計である。これは、長崎市に原子爆弾が投下された時間だ。77 年前のこの時間に長崎の街が一発の原子爆弾によって一変した。長崎の原子爆弾は松山町の上空 503m で炸裂した。たくさんの方が亡くなり、犠牲になった。とても苦しくて辛かったと思う。原子爆弾はものすごい威力を持っている。だからこそ次の世代へ伝えなければいけないと私は思う。今、長崎は新しい街に復興しとても綺麗に生まれ変わっている。私は宿泊先で見た長崎の夜景がすごく印象的で、心に残っている。原子爆弾で亡くなってしまった人々があの夜景を見たらどんな気持ちになるのかと考えてしまう。とても感動すると思った。また、あの時はこんな綺麗な街に生まれ変わるなんて考えられなかったと思う。11 時 2 分という時間を決して忘れてはいけないと思った。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの研修を通して新たに学んだことがたくさんある。印象深かった言葉は「長崎を最後の被爆地に」という言葉だ。私は、この研修に参加して初めてこの言葉に出会った。耳にした時から今日までとても印象に残る言葉だった。長崎市が取り入れているこの言葉は、「もう二度と原子爆弾が落とされない、平和な世の中に

なりますように。そして長崎が最後の被爆地になりますように。」という思いが込められている。

これは誰が聞いても印象に残る言葉だと私は思った。また、その他にも原爆資料館で見た、全てのものが心に残った。今まで「長崎原爆」のことは自分にはほど遠く、あまり関係のないことだと思っていたが、そんな考えは間違っていたことにこの研修で気づかされた。77 年前、何が起きたのか。どれだけの人が苦しみ、犠牲になったのか。そして「核兵器廃絶」を全国民からどうして求められているのか、この研修で学んだことを決して忘れない。

- 「核兵器」と人類は共存できない。
- 平和の原点は人間の痛みがわかる心を持つ事。

核兵器は一人では無くせない。平和も一人では創れない。私は日頃から戦争や平和の大切さを考えていきたいと思った。平和は決して当たり前なことではない。命の大切さ、命の尊さ、そして平和の尊さを次の世代へ伝えていきたいと思った。

『長崎を最後の被爆地に』

私は「核兵器廃絶の必要さ」と「原子爆弾の恐ろしさ」をこの言葉を胸に次の世代へ伝えていこうと思う。そして、平和への第一歩を踏み出したい。

# 長崎で学んだこと



郡山市立富田中学校2年 安 齋 豪

## 1 派遣研修への参加に当たって

僕が、今回この長崎派遣事業に参加しようと思った動機は、ロシアとウクライナ情勢が問題視される中、何故このように争いは起こるのかと思ったからだ。そんな時、この長崎派遣事業の存在を知り、参加を決めた。

1945年、8月6日と9日に原子爆弾が投下された。この爆弾の威力はすさまじく、何万人もの犠牲者が出た。そして今、ロシアのプーチン大統領は核兵器の使用を示唆している。科学技術が大きく進歩した現在、原子爆弾の威力は昔の比ではないだろう。この2点は何か必ず関係がある、そう思ったのも今回派遣事業に参加した理由の一つだ。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 原爆資料館

原爆資料館には、当時の状況を物語る多くの資料があり、そのどれもが悲惨なものばかりだった。その中で特に印象に残ったのは3m弱の原子爆弾の実物大模型だ。この大きさの爆弾が空から落ちてきて、7万人もの人の命を奪ったと考えるととても胸が痛んだ。そのほかにも印象に残った物は、11時2分の時を刻んだまま止まっている時計だ。それを見ると原子爆弾の威力がどれほどだったかが分かる。原子爆弾が日本に落とされる光景が目に見え、恐怖感が込み上げてきた。

### (2) 平和祈念式典

8月9日午前11時2分、全員で一斉に黙とうをささげた。その時、僕たちは願った。「もう核兵器が使用されないように。」と。僕がこの平和祈念式典で特に印象に残ったことは、実際に被爆した人の話だ。その話もこの人たちが

いなくなってしまうたら、僕たちがこの悲劇を繰り返さないよう語り継いでいかなくてはいけないと思った。また、この祈念式典の合唱の際に歌われた曲を聴いてはっとした。この歌の名前は「千羽鶴」というのだが、この歌は今回の長崎派遣事業の結団式の際に流れていた歌だった。その時は何とも思わなかったが、原爆について学んだ後に聴くと、その歌の印象はガラリと変わり、とても胸に響くものがあった。歌詞の一つ一つに思いが込められており、胸にこみあげてくるものがあった。この平和祈念式典で僕たちの想いが今なお核を保有している国にとどくよう、心から祈った。

### (3) 青少年ピースフォーラム

この青少年ピースフォーラムでは、北海道から沖縄まで多くの人が集まり、僕は多くの人と交流した。そこで僕は、「戦争が再び起きないようにするにはどうすればよいか。」という議題を考えた。最初は具体的な解決方法が思いつかなかったが、他の人の意見を聞いて、実体験を被爆者の方から教えてもらったように、僕たちも原爆の、戦争の、核兵器の恐ろしさを語り継げばいいということに気が付いた。その他にも、愛で解決するといったアイデアなど、ユニークなアイデアが多くあり、自分の視野をさらに広げることができてよかった。どの人も案を本気で考えていて、自分の価値観と他の人の価値観を尊重しあえたので良かった。

今回、この機会に得られた経験を活かし、相手の価値観を大切にしたいと思った。



< 長崎の現在の風景 >

### 3 心に残ったこと

上の写真はただの風景ではない。原爆が落ちた「長崎」の風景だ。あまりに美しく、ここに原子爆弾が落ちたという想像ができなかった。僕は原子爆弾が落ちた後の写真を見たことがあるので、知っていたそこはまさしく「更地」だった。つまり、1からこの美しい町に復興したのだ。僕はその事実には驚いた。かつて人の「塔」で流れをふさぎ、辺り一面が地獄絵図だった川も綺麗になっていた。僕は長崎の人々の素晴らしい復興作業が形となってこの美しい長崎の風景を生み出したのだと思った。そして同時にたった一発の爆弾で、今までの日常を奪ってしまう原子爆弾にとても大きな恐怖を抱いた。「今現在、被爆者の方々の高齢化が進んでいます。このままだと、核兵器による恐怖が分からない人も出てくるかもしれません。」そう語る被爆者の方の話聞き、そうなってはいけないと思った。僕は、今回の経験を活かし、家族や友人を通してこの悲劇の実態を知ってもらうことによって、もう二度とあのようなことが起きないよう黙祷でただただ祈った。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

僕は、今回この長崎派遣事業で、多くの貴重な体験をさせていただいた。僕はこの派遣事業で戦争、原爆、そして核兵器の恐ろしさが分かった。さらにこの派遣事業で僕は特に「平和の泉」が印象に残った。平和の泉にある石碑にはある少女の言葉が彫られている。その内容は、のどが渴いていて油のようなものが浮かんだ水を少女が飲んだというものだ。少女が油の浮いた水を飲まなくてははいけなかったほどつらい環境だったということが分かり、とても胸が苦しくなった。環境の影響がこれほどまでに大きいことを、僕は友達にも伝えなければいけないと思った。今、そしてこれからの課題は核をなくすことだと思う。今現在、ロシアが核の使用を示唆している。このようなことは、絶対にあってはならない。自分には関係ないと思っけていても、一人の小さな呼びかけで、何かが変わるかもしれないと思い、「行動」することが大切だと思った。

# 命の尊さを伝えるために



郡山市立大槻中学校2年 佐藤 菜央

## 1 派遣研修への参加に当たって

私は戦争がどれほど恐ろしいものか、そして原子爆弾がどのような被害をもたらすのか学ぼうとしたことがなかった。しかし、今年2月にロシアによるウクライナ侵略が始まって、毎日のようにニュースで見えるようになった。

自分の戦争の知識が浅はかであること、また世界では戦争がいつも簡単に起こってしまうことを知った。戦争に関する問題は、私たちの身近なものだということを思い知らされた。

そのため、先生から長崎派遣についての話を伺った時、これは「戦争」や「原子爆弾」の脅威を知り、世界を平和に導くための私の最初の一步になると思い参加を決意した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 旧城山国民学校

旧城山国民学校は爆心地に最も近い国民学校だった。そのため、被爆当時鉄筋コンクリート3階建てだった校舎の2・3階は全焼し、大きく破壊された。当時学校にいた教職員31人のうち28人が、およそ1,500人いた生徒のうち1,400人余りが亡くなった。

私は被爆校舎で見た旧校舎の壁や写真パネル、少年平和像が印象に残っている。特に学校が破壊された写真や熱で黒くなった木煉瓦からは原爆そして戦争の恐ろしさを感じた。しかし、それと同時に原爆で大切な人が奪われ、もう二度と同じことが起きないように平和を祈る遺族の方たちがいることを知った。私たちがその思いを伝えていかなければと強く感じた。

### (2) 原爆資料館

原爆資料館には、被爆資料や被爆の惨状を示す写真などが展示してあった。その中には、長崎に投下された「ファットマン」の実物大模型があり、ファットマンの造りを見ることができた。それを見た時、「こんなに小さな物であっても、あんなにたくさんの人々を傷つけたんだ。」と恐怖を感じた。

その後、現代の世界に存在する核兵器の数を見た時には、本当に驚いた。なんと世界には現在12,720個もの核兵器が存在しているのだ。しかも、この核兵器たちは、広島や長崎に落とされた原爆よりひとつひとつの威力が強いそう

だ。私はこの事実を知った時、改めて私たちが核の脅威と隣り合わせだということを知った。

### (3) 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

平和祈念式典では、長崎市長による長崎平和宣言や被爆者の方による平和への誓い、被爆者の方たちによる合唱を聴くことができた。

私は、この式典の中で、心に響いた言葉があった。それは、高校生平和大使たちの合言葉「微力だけど無力じゃない。」という言葉だ。長崎市長の田上氏は、この言葉を「平和を求める私たち一人ひとりの合言葉にしていましましょう。」と宣言していた。この言葉を聞いた時、私は勇気をもらえた気がした。

式典に参加して、郡山で原爆の恐ろしさや命の尊さについて伝え、少しでも世界が平和に近づくよう、微力でもいいから行動していきたいと思った。



＜戦争を起こさないために＞

### 3 心に残ったこと

青少年ピースフォーラムで、全国各地から来た人たちと「なぜけんか・戦争が起こるのか。」「けんか・戦争を起こさないためにはどうしたらいいか。」について話し合った。この写真は、今の自分に出来ることを書いて発表し合った時のものだ。

私は、この時までけんかや戦争を起こさないようにするためには、相手の立場になって考え、自分がされて嫌なことをしないようにすることが一番の解決策だと思っていた。しかし、今回みんなで話し合った時に、「相手の意見や考え方を尊重する。」「関わったすべての人に感謝する。」等の考えを聞いてけんかや戦争を防ぐ方法はもっとたくさんあることに気づかされた。たくさんの人たちと話し合うことで、自分の視野を広げられることを実感した。

これからは、いろいろな人の意見を自分の考えに取り入れ、世界をより広い視野で見つめ、考えて行動できるようにしていきたいと思った。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの4日間、戦争や原爆が多くの尊い命を奪って恐ろしいものであることを肌で感じる事ができた。また、たくさんの人と意見を交換し合うことで、自分の考えの視野を広げられることを学んだ。そして、今まで平和だと感じていることが当たり前なことではないことを知った。

今年、被爆者の方たちの平均年齢は84歳を上回った。この時、被爆者の方々の貴重なお話を聞けなくなる時が、迫ってきていることを思い知った。今回の研修で、被爆者の方が「戦争は、絶対に繰り返してはいけない。」という強い想いを伝えて下さった。

だからこそ私は、周りの友達や家族などたくさんの人に、被爆者の方々の想いや、今回学んだ戦争・原爆の悲惨さ、平和がありがたいものだということを伝えたいと思った。そして、そのことを使命としていきたいと思う。

私は、これからの平和を当たり前にするため、そして長崎を最後の被爆地にするための一歩を踏み出していきたい。

# 平和であるために



郡山市立小原田中学校 2年 津 守 隆 成

## 1 派遣研修への参加に当たって

小学6年生の時に、広島、長崎に原爆が落されたことを学んだ。その時から私はこの太平洋戦争における原爆について知りたいと思っていた。小学生の私でも原爆の恐ろしさを想像して、原爆が落されるようなことが二度と起きてほしくないと思っていたからだ。そのような思いがあり、中学生になって、この長崎派遣事業を知った時には、こんなチャンスは無いと思い長崎派遣事業に参加することを決めた。そして長崎でしかわからないことを深く考えようと決意した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは、私の今までの人生の中でも、とても貴重な体験だった。その中でも特に印象的だったことは2つある。

1つ目は被爆体験講話だ。原爆の被害に実際にあった方からお話を聞くことができた。実際に体験した話は本当に恐怖を感じた。原爆が落とされた時の様子が鮮明に想像できたからだ。そしてその様子は地獄そのものだった。その時に僕が今まで想像していた原爆より、もっともっとひどく恐ろしいということがわかった。

2つ目は疑似被害体験だ。そこでは自分の大切な物をカードにして、戦争によって大切な物がカードによって無くなっていくことを体験した。私は最初 20 枚ぐらいのカードを持っていたが、最後は 1、2 枚しか持っていなかった。大切な物が 1、2 個しか残っていなかった。そこで私は戦争がどれほど大切な物をなくしていくのかを身をもって感じる事ができた。

### (2) 平和祈念式典

平和祈念式典は、私の長崎派遣事業参加の中で最も印象的なことだと言える。私は平和祈念式典に参列することが出来た。そこには日本中さまざまな都道府県から来た方や外国の方、内閣の方まで多くの方が来ていた。そして式典開始すぐに合唱が始まった。それは世界でただひとつ被爆者から成る合唱団の歌「もう二度と」であった。その歌声は力強く、参列者に訴えかけるかのようだった。そして 11 時 2 分黙とうをした。毎年 8 月 9 日 11 時 2 分に黙とうをしていたが、今年は原爆のことや長崎のことを考え、とても悲しくいたわる気持ちをささげる思いで、黙とうした。

### (3) 原爆資料館

原爆資料館は、原爆に関するさまざまな展示物が展示されていた。展示は、原爆の被害を受けた物のコーナー、被害からの復興に力を尽くした方々のコーナー、原爆そのものについてのコーナーなどがあり、最後には原爆についての DVD を見ることもできた。映像はより情景が想像出来て、苦しかった。

原爆資料館にあるものは、どれも目をそむけたくなるものだったが、さまざまな物や映像をみたり、聞いたりしたことによって、原爆についてより詳しく知る経験になり、こんなことは二度とあってはならないとあらためて強く思った。



＜ 溶けたガラス瓶 ＞

### 3 心に残ったこと

私が一番心に残ったのは溶けたガラスの瓶だ。この瓶は原爆資料館に展示してあった物だ。原爆が投下された時の温度は3,000度～4,000度と言われている。とても想像できない3,000度～4,000度の世界を誰彼かまわず浴びせられたのだ。どんなに熱く苦しただろう。痛かっただろう。とても胸が痛む。そんな地獄を誰にも味わわせてはいけない。

身近にあったガラス瓶の溶けた写真によって、平和な日常が一瞬に変わった原爆の恐ろしい熱さを想像し、原爆などの核を無くし、世界が平和であり続けなければならないと感じた。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの4日間の派遣研修で、原子力爆弾がこの世に存在すべき物ではない事を心底感じた。そして「戦争に関わらない」という考えから、「戦争に関心を持つ」という考え方に変わった。これからの生活では、この長崎派遣事業で学んだことを生かし、「平和であることが当たり前」ではなく、「平和である事は、多くの犠牲者のおかげで成り立っている」先人や犠牲者への感謝を忘れずに生活していきたい。

最後に長崎派遣事業で学んだ原爆の恐ろしさ、いかに平和が大切かということを中心に刻み、友人や身の周りの人たちにこれから一生伝え続けていくことが私の役割であると感じている。これから団員としての使命をしっかりと果たしていきたい。

# 調和を求め平和を生む



郡山市立宮城中学校2年 伊藤樹生

## 1 派遣研修への参加に当たって

僕が派遣事業に参加した理由は、戦争の悲惨さを知るためだ。今、ウクライナとロシアの紛争がある中で、戦争や原爆の恐ろしさについて知ることは大切だ。そのため、被爆地を訪れることで、様々な歴史を知り、平和の大切さを深く考えることができると思った。被爆者の話やたくさんの活動から原爆の酷さを知り、平和の尊さを学びたいと思い、この研修への参加を決意した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 原爆資料館

この資料館に展示してあるものはどんなものも、僕にショックを与えた。表面がぶつぶつした瓦。これは原爆が爆発したときの熱によって沸騰したことによりできたものだ。原爆の爆発では、地表の温度が3,000～4,000度にもなり、石などの物質はすぐに溶けてしまったのだ。この爆発のなかで苦しんだ人々が、どのような痛みを味わったのかを想像すると、とても胸が痛くなる。

次にショックが大きかったものは、被爆した人々の身体にやけどやケロイドといった症状が出ている画像だ。ケロイドとは、爆発や放射線によって、肌がただれたものだ。2枚の画像があり、1枚は子どもがやけどの治療を受け、泣いているもの。もう1枚はケロイドが発症した高齢の男性が、冷たい眼差しで座っているものだった。この2枚の画像を見ているだけで痛みや苦しみ、叫びが伝わってきた。それと同時に、「やけどによって顔を見ても誰だか分からない姿の自分を、家族や友人が見たらどう思うのだろう。」という考えも浮かんできた。もし、

僕が当事者だったら、ショックで立ち上がれないと思う。最後にこの資料館は水を求めて亡くなった人たちのために、館内のどこにいても水の流れる音が聴こえるつくりとなっている。心が安らぐ優しい音色だ。

### (2) 青少年ピースフォーラム

8月8日から9日には、戦争について考える青少年ピースフォーラムが行われた。1日目は、被爆者の山田一美さんの講話を聴いた。肌だけでなく、心で感じたことを語ってくださった。山田さんは当時12歳だった。山田さんは爆発直後、外にいたため、爆風をもろに受け背中全体にやけどを負った。本人によると、「体が焼けるほどの熱さが長い時間続いていたように感じた。」と話していた。また、川に遺体が浮いていたり、家やトラックが潰れたりして、無惨な現場が広がっていたらしい。僕は、この話を聴いているだけでも、気分が悪くなった。そこから中に遺体が散らばっている光景など、誰も見たいとは思わないだろう。山田さんが一番伝えたいことは、「戦争だけは起こしてはいけない。」ということである。僕もこの事を一番に考え、生きていくべきだと思った。山田さんは、僕たちに生きることの素晴らしさを教えてくださったのだ。2日目は、意見交換会を行った。各県から来た中学生と共に、身近な出来事や世界規模の問題として「けんか・戦争をなくすためにはどうすればいいか」というテーマで話し合った。「謙虚に対応する、暴力で解決しない。」という意見が出た。まったくその通りで、権力や暴力など「力」ではなく、話し合いで解決することで、平和が生まれるのだと思う。たくさんの中学生と意見を交わすことができ、とても貴重な体験となった。



< 長崎平和公園より >

### 3 心に残ったこと

一番心に残ったことは、平和祈念式典だ。この写真は式典の前日に長崎平和公園に訪れた際に撮った1枚だ。この像には、「戦争をなくそう。」という多くの願いが込められているということを知ったとき、「人々の願いや可能性は無限に広がっているのだな。」と思い、感心した。人々の願いが詰まっているからこそ、大きな輝きを放っている偉大な像なのだと思う。平和祈念式典では、原爆による死没者を吊い、被爆者の想いを胸に刻むことができた。また、僕は長崎市長の言葉に感動した。「核兵器の使用が“杞憂”ではなく“今ここにある危機”であることを世界に示しました。」これはロシアがウクライナに対して、核兵器による威嚇を行ったことへの重大さを僕たちだけでなく、世界中に教えてくれた言葉だ。長崎市長の願いや訴えにはとても説得力があった。それは核兵器の廃絶を実現するために、行動に移しているからだと思う。僕も「微力だけど無力じゃない」という合言葉を胸に戦争の恐ろしさや苦しさを世界に発信していきたい。

平和祈念式典によって、平和の大切さや平和を実現することの大切さなど強い想いを感じることができた。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

派遣研修では、県全体で平和の大切さをみんなに知ってもらえるような活動をしていると感じた。戦争のない時代に生まれてきたからこそ、被爆者の想いを自分の肌で感じる事ができた。また、僕たちのように想いを紡いだ人たちが、次の世代へ原爆・戦争の悲惨な歴史の記憶を伝えていかなければならないと思う。そして、平和を実現するため、「戦争だけは起こしてはいけない。」と声を上げることに貢献していきたい。水を求め、家族を求めて亡くなった原爆死没者に追悼の意を込め、長崎原爆の被害を決して忘れることのないように、日々生活していきたいと、心から誓った。また、長崎を「最後の被爆地」にするために核兵器の廃絶を望み、世界永久平和が生まれることを願う。長崎原爆の悲惨や平和について学んだ経験を生かし、人の痛みや苦しみを理解できる人間になり、救えるように責任感のある行動を心掛けていきたい。

# 核兵器のない平和な世界へ



郡山市立御館中学校2年 滝田みのり

## 1 派遣研修への参加に当たって

1945年8月9日に長崎に原子爆弾が投下されたことは知っていたが、被爆者の想いやどのくらいの規模であったかは知らなかった。夏休みが始まる前に、長崎派遣事業のことを先生から伺い、ぜひ行ってみたいと思った。この研修に参加すれば、原子爆弾による被害や被爆者のお話が聞けると知り、実際に被爆地である長崎市へ行って学びたいという思いが強まった。自分の目で見て、耳で聴いて、感じたことをたくさんの人に伝えていきたいと思い、参加することを決めた。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 永井隆記念館

永井隆博士は、原子爆弾が投下された時、爆心地近くの長崎医大物理的療法科部長室に居た。猛烈な爆風で吹き飛ばされ無数のガラス破片を浴び重症を負うが、頭に包帯を巻くだけという応急処置だけで、救護活動にあたったそうだ。救護活動の最中にも、何度も意識を失い、倒れては起きを繰り返していた。37歳の時に、白血病の診断を受け、余命3年を宣告され寝たきりの状態になるが、長男の誠一（まこと）と次女の茅乃（かやの）の2人の父親として、また作家として執筆活動をした。博士の残した言葉にはこんな言葉がある。

『戦争はおろかなことだ！戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである。』

花咲く丘より

この言葉には、永井博士の力強いメッセージが、込められていると思った。それは、戦争に勝っても負けても待っているのは、滅びだけということである。私はそのメッセージにとっても共感した。

### (2) 平和祈念式典

私は、出島メッセ長崎という会場で、平和祈念式典の様子を見ていた。式典は、被爆者の方々の『もう二度と』の合唱から始まった。この曲の、「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞が印象に残っている。この歌詞を聴いて、核兵器廃絶と世界の平和への強い思いが伝わってきたからだ。それと同時に、このメッセージを、受け継いでいこうと決めた。そして、原子爆弾が投下された午前11時2分に長崎の鐘が鳴り響く中、黙とうをし、長崎の町が祈りに包まれた。77年前の8月9日、一瞬にして何の罪もない人が大勢苦しんでいたことを想像すると、心が痛んだ。私はこの時、心の中で「長崎を最後の被爆地に。そして、世界が永遠に平和でありますように。」と祈りながら黙とうを続けた。被爆者の方々や田上市長、岸田内閣総理大臣のお話を聞き、平和に対する思いがより強くなった。

今、世界では、長崎に投下された原子爆弾よりもさらに威力の強い核兵器が約12,700発も存在している。しかも、今もなお新たに作り出している国もあるようだ。もしも、世界中で核兵器が使われてしまったら、どうになってしまうのだろうか。自分の国を守るために原子爆弾を開発したり、使用したりしていいのだろうか。そんなことはあってはならない。だから、私は核兵器廃絶を訴えていきたいと思った。



< 原子爆弾 ファットマン >

### 3 心に残ったこと

原爆資料館で長崎型原子爆弾「ファットマン」を見たのが印象に残っている。これは、長崎に投下された原子爆弾のレプリカである。この原子爆弾の長さは3.25メートル、直径1.52メートル、重さは4.5トンあり、その形状からファットマンと呼ばれている。爆発した際には、TNT火薬21キロトン分に相当するエネルギーを放出した。エネルギーの内訳は、爆風が50%、熱線が35%、放射線が15%であった。これらが、複雑に絡み合っ、長崎の町に大きな被害をもたらした。ファットマン自体は大きい、中にある核は、ソフトボールくらい大きさだった。この小さな核が、あんなにも大きな被害をもたらすとは思わなかった。この原爆投下で生き残った方々も、放射線の影響により白血病やがんになり、現在でも苦しみながら生きている。そして、このような恐ろしいものを作り出したのが私たちと同じ人間である。それを知った私は落胆した。

### 4 派遣研修に参加して感じたこと

派遣研修の4日間、新しい友達と協力しているいろいろな活動ができた。派遣研修に行くまでは、すごく不安な気持ちでいっぱいだったが、一緒に行動し、会話をしていくうちにすぐに打ち解け、お互いの意見を交換することができた。そして、如己堂・永井隆博士記念館での研修や青少年ピースフォーラムでの活動を通して、感じたことがあった。それは、この何気なく笑ったり、楽しんだりしている日常こそが、平和であり幸せであるということである。また、被爆者のお話を聴くことができたのは、貴重な体験であり、平和の尊さをより身近に感じられるようになった。

世界では現在でも、戦争が続いている地域がある。今の日本は、戦時中に比べれば、安全な生活ができているため、わたしたちは平和というものに無関心になってしまっているところがあるのではないだろうか。だからこそ、二度と戦争や原爆によって悲しむ人が出ないように、戦争の恐ろしさや原爆の悲惨さを語り継いでいくことがわたしたちの使命だと感じる。まずは家族や友達、学校の先生など自分の周りの人に今回の研修で学んだことを伝えていきたいと思う。

# 長崎派遣研修



郡山ザベリオ学園中学校2年 大里 優 誠

## 1 派遣研修への参加に当たって

僕が今回の研修を通して学びたいと思っていることは3つある。

1つ目は、原爆投下当時どのようなことがあったのかである。特に原爆の被害をこの目で見て原爆の悲惨さを確かめたい。

2つ目は、放射線の被害について。今僕が住んでいる福島と長崎の共通点は放射線の被害である。福島は2011年にあった東日本大震災の影響で原子力発電所の事故で放射線の被害があった。そして長崎では原子爆弾による放射線の被害があった。僕は福島県内のことしか知らないのを知りたいと思った。

3つ目は、長崎の原爆についてである。なぜなら原爆は特殊なものなのでなかなか学ぶ機会がなく、長崎が最後の被爆地なので知りたいと思った。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 青少年ピースフォーラム

このピースフォーラムではたくさんのことを学べた。

特に、被爆者の実際の体験を聞いて、その人の当時の状況を知ることができた。また、平和学習では班の人との意見交換で、長崎のことについて様々な県から来た同年代の子たちと考えることができた。

### (2) 平和公園

平和祈念式典では、総理大臣の話を聴くことができてよかった。どこが良かったかと言うと、総理大臣の話を、直接聞くことができたからだ。その他、平和宣言では、被爆者の方の話を聴いて、その人の宣言には説得力があると思った。なぜなら、その人は実際に原爆の被害にあい、今回辛い経験を話し、そのことから平和について語っていたからだ。

## 3 心に残ったこと

僕が心に残ったことは、平和祈念式典の平和宣言の際聴いた、実際の話や、苦労した経験だ。平和祈念式典の時、初めて苦労した話を知った。そして総理大臣の話では被害にあった人への対策を考えているといったことが印象に残った。

## 4 派遣研修に参加して感じたこと

僕が長崎派遣に参加して学べたことは、80年ぐらい前に実際にあったことだ。写真で見たり、動画で見たり、被爆者の話を聴いて、原爆投下当時の状況やその被害を事細かく学ぶことができた。そしてこれからは僕の知り合いに悲惨さや実際にあったことについて説明したい。



< 平和の象徴 >

# 平和を願って



郡山市立湖南小中学校 8年 森 岡 依芙伎

## 1 派遣研修への参加に当たって

私は、8月6日と9日に、広島と長崎に原子爆弾が投下されたのは知っていたが、原子爆弾によってどのくらいの人々が被害にあったのか、そして何が原因で被害にあったのかを詳しくは知らなかった。毎年8月になると、ニュースで原爆のことや、被爆した広島と長崎のことを放送していて分かることも増えてはきたが、分からないことも多々あった。そこで、被爆地である長崎を訪れ、分からないこと、知りたいことをこの目で確かめたいと思い、この「長崎派遣事業」に参加した。

## 2 派遣研修に参加して

### (1) 永井隆記念館

永井隆記念館には、博士にまつわるたくさんの資料が展示されていた。永井氏は、満州事変、日中戦争の二度の従軍を経て、医学博士になった。1945年6月に過度の散乱放射線被曝による慢性骨髄性白血病を患い、余命3年と宣告された。その後、同年8月9日に長崎市に投下された原子爆弾で博士は市民とともに被爆、幸い死には至らなかったが右側頭動脈切断の重症を負い、そして妻までも失った。だが、博士は重症を負いながらも生き残った医師や看護師、技師とともに、意識を失いながらも救護活動を行った。

余命3年と宣告され、更に被爆して重傷を負ったら、救護活動や本を書き続けることは大抵の人にはできない。今生きることや、家族のことを想うことで精いっぱいだと思う。しかし博士は病氣と闘いながら執筆活動を続け、平和といのちの大切さを訴えた本を書き、平和と命の大切さを訴えていた。それだけ博士の平和への

の思いが強いと感じられる。

### (2) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原子爆弾の脅威、原子爆弾がもたらした被害などの資料が展示されていた。原子爆弾の投下によって、長崎市の約3分の1に当たる広い地域が焼き払われ、長崎市に住んでいた人口の約半分が死傷した。子どもから老人まで何の罪もないたくさんの市民が被爆した。そのうちの65%は老人や子ども、女性だった。爆心地の近くで見つかった米は、炭のように真っ黒いものに変化し、ガラスの瓶は溶けていた。爆心地から800メートル離れた民家にあった時計は爆風で壊れ、時計の針は原子爆弾が爆発した午前11時2分を示していた。更には、爆心地から約4.4キロ離れた板壁には、はしごと監視兵の影が焼き付けられていた。改めて、私は、原子爆弾の恐ろしさを痛感した。

この77年前に起きた事実を、私は原爆資料館で実際に見たり聴いたりしながら学ぶことができた。もう二度とこんな悲しみを繰り返してはいけないという思いが、今まで以上に強くなった。

### (3) 青少年ピースフォーラム

1日目は被爆者の講話を聴いた後に原子爆弾が投下された時にどうすればよいかを疑似体験した。被爆者の講話では原爆投下直後の状況を知ることができ、原子爆弾の怖さを実感できた。その後の疑似体験では原子爆弾により家族や友人を無くすとどういう気持ちになるのか体験できた。この2つのことで原子爆弾のもたらすものが実際に分かった。

2日目はほかの地域の人たちと、戦争や争いの原因とその解決策について意見交換を行い、どうすれば戦争や争いが起こらないようにでき

るか理解を深めることができた。また、MY 平和宣言を書き自分に何ができるのかが今まで以上に考えられるようになった。

### 3 心に残ったこと

この写真は、長崎に投下された原子爆弾の模型である。その太った見た目から「ファットマン」と呼ばれたのだが、この原子爆弾が長崎市を一瞬で焼け野原にし、たくさんの市民の命を奪った。爆弾自体は大きい、核は野球ボールぐらいの大きさだと知った。野球ボールぐらいの核がこんなに大きな被害を及ぼすと知って、核兵器の恐ろしさを感じた。原子爆弾が及ぼした被害は、爆風、熱線、放射線によるものだった。生き残った人たちも、放射線によって白血病やがんになり、原子爆弾によって体にも心にも傷を負った。

現在、世界には約1万3千発の核弾頭がある。長崎に投下された原子爆弾よりも威力が強いものが使用されたらと考えると、とても恐ろしい。核兵器の恐ろしさは、被爆した日本が一番知っている。だから、私たち日本人が核兵器の恐ろしさを世界に伝え、核兵器廃絶を訴えることはとても大切だと思った。

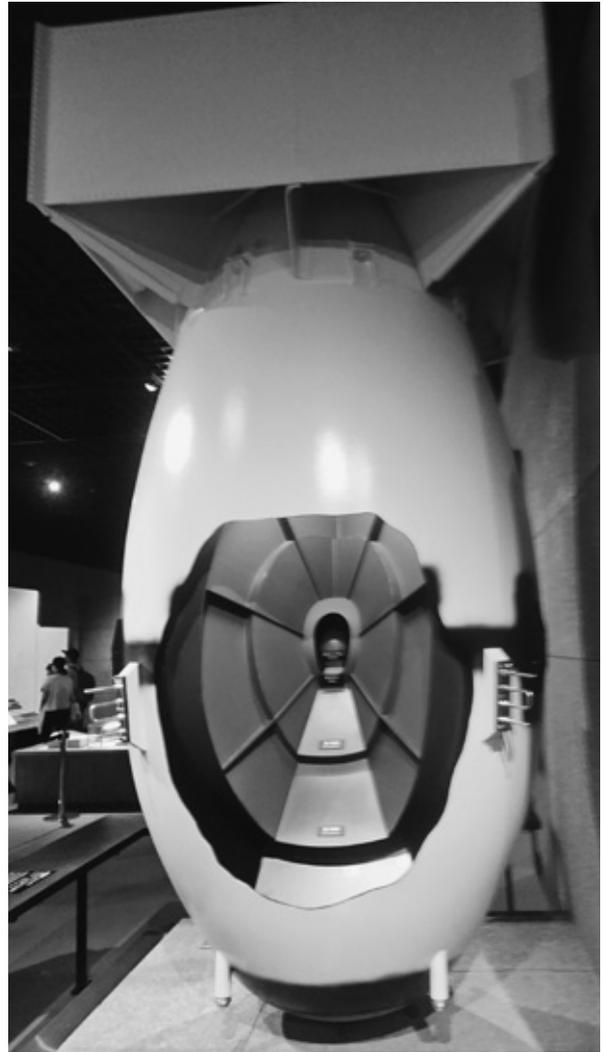
### 4 派遣研修に参加して感じたこと

私は長崎派遣事業に参加したことで、戦争や原子爆弾、平和とは何かを学ぶことができた。

戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを経験したことのある被爆者の平均年齢は84歳を超えている。被爆者の話を聞いた私たちが戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさを次の世代へ伝えないといけない。そして平和とは何かをいろんな人が考えて「戦争はやってはいけない」や「核兵器廃絶」を訴え続けられれば、いずれ平和な世界になるはずだ。原爆が投下されてから77年たった今もどこかで苦しんでいる人がいるかもしれない。それほど原爆による放射能の影響がまだ残っているからだ。

次の2点を自らの使命として取り組んで行きたい。

1点目は、研修で学んだことを世界に発信すること。2点目は、身近なところ、例えば、家族や友達と平和について考える場を進んで設けること。



＜長崎に投下されたファットマン＞

これらのことにより、核兵器廃絶や戦争反対を訴え、世界平和を目指し悲劇を繰り返さないことを私は誓う。

最後となるが、この研修で学んだことを世界に発信することが大事なことだと思う。世界に発信し、核兵器廃絶や、戦争反対を訴え、平和な世界になれば二度と戦争で苦しむ人はいなくなると思う。このような悲劇を二度と繰り返さないように平和についてもっと深く考えていきたいと思うようになり、この研修に参加できたことに感謝している。

## 【表紙・裏表紙に掲載されている祈念碑】



### 「長崎の鐘」(平和公園)

原爆投下後33回忌となる1977年に、遺族や被爆者およそ21,000世帯の拠出金により建立された。原爆殉難者の冥福を祈り、世界の恒久平和への願いが込められている。

### 「浦上天主堂遺壁」(爆心地公園)

爆心地から約500メートルの場所にあった教会「浦上天主堂」は、原爆による爆風で破壊された。この遺壁は、天主堂南側の壊れて残った壁の一部を移築したものである。



### 「原子爆弾落下中心地碑」(爆心地公園)

この碑がある長崎市松山町の上空約500メートルで原爆が炸裂した。塔の前に置かれた原爆殉難者名奉安箱には、爆死された方、被爆者でその後亡くなられた方々の氏名(複製)が奉安されている。

### 「平和を祈る子の像」(平和公園)

1967年8月9日に長崎平和の折り鶴会によって建立された。

碑文

原子雲の下で 母さんにすがって泣いた ナガサキの子供の悲しみを  
二度と、くりかえさないように 大砲の音が 二度となりひびかないように  
世界の子供のうえに、いつも 明るく太陽が輝いていますように



### 「原爆殉難教え子と教師の像」(平和会館前)

原爆で亡くなった児童・生徒の慰霊のため、1982年に教職員らによって建立された。上に立つ巨人は原爆の脅威を振り払おうとする姿を、下の子どもたちは平和を叫ぶ姿を表している。

# 令和4年度 郡山市中學生長崎派遣事業 「2022 ナガサキへのメッセージ」報告書

発行日 令和4年11月26日

発行者 郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会  
(事務局:郡山市総務部総務法務課)

〒963-8601 郡山市朝日一丁目23番7号

電話: 024-924-2031

FAX: 024-924-0956

Eメール: soumuhoumu@city.koriyama.lg.jp

郡山市 ナガサキ

検索 

印刷製版 株式会社ヨシダコーポレーション

